

T 02
N 69
31

日本における統計学の発展

第 31 卷

話し手 瀬 木 三 雄

聞き手 前 田 正 久



1981年3月9日(月)

瀬 木 宅 に て

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。
江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)
- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

瀬木 歴史的な話をするようにという話だが、歴史的な話は年代が伴うものだから、私が、話題になるようなことを年代順に、まずざっとお話しするか、それとも、どちらがよい案をお持ちですか。

前田 大体それで結構なんですけれども、幾つか伺いたい点を挙げると、一つは、そもそも先生がどういうきっかけ、動機で統計のこともおやりになるようになったかということ。それから、先生がその統計の分野に足を踏み込まれた前後に、師として仰がれた先生はどのような方々であり、あるいはどういう方々のものをお読みになって統計の勉強をされたか。要するに、いままで先生が母子衛生に関する統計、あるいはがんの統計をおやりになってきた中で、お仲間というか、先生の統計の仕事の歩みの中で、どういう方々がご一緒であり、どういう方々とお仕事をされたかという点。それから、統計だけでなく、その周辺でももちろん結構なんですけれども、先生ご自身の業績。そして、最終的には統計分野、統計学会に対するご意見なりご批判がございしますれば、聞かしていただきたい。

瀬木 わかりました。

「統計」という字が私の書き物で初めて出たのは、不謹慎かもしれぬけれども、私はこういうものを書いたことがあるんですよ。『山岳遭難史』というの。これは、昭和11年に共立社から、わりあいにはりっぱな『山岳講座』というのが何冊か出たんです。

前田 それ1冊まるまる先生ご執筆で？

瀬木 いえ、そうじゃない。これはいろんな人の分担執

筆で、私が『山岳遭難史』というのを一番初めに書いた。たとえば篠井金吾さんというのは、東京医専で外科の教授をした医者ですけれども、これも山の人間ですね。こんないろいろな人が分担執筆をした中で「山岳遭難と統計的考察」というのをやったわけ。これが、私の書いたもので「統計」という字が出た初めです。いまお話し of 統計という意味と合うか合わぬかわからないけれども。

いまは山登りで死ぬ者が多いから、こんなこととってできません。1人1人つまみ出すことはとうていできませんが、このころはまだ少なかったですからね。それで10年ばかりの間に亡くなった人を一々書いて、後で、これはどういう原因で亡くなったのか、登はん中墜死とか、これはスイスの話、これは日本の話というふうに、初めて日本の山岳遭難と外国とを比較して、統計的観察をしたという話で、これはいままますます重要な問題になっている。

このころは山登りやっとなんですよ。それでこういう本も書いた。いまは心臓が悪くて、それはとても。

前田 お若いころは、かなりこういう本格的な登山をやっておられたんですか。

瀬木 山岳部に入っていましたでしょう。

だから、昭和6年ですか、これはずいぶん古い。また学生時代に書いた本ですが、分担執筆で、私は「天幕生活」とか「登山とキャンプ」とか、こういうものを書きました。

前田 これお書きになったのは、学生といたしても、どこの？

瀬木 これは名古屋の高等学校の山岳部で、この連中が

みんな結局東大山岳部にも行ったわけ。

『山岳遭難史』を書いた11年は、東大の産婦人科の教室にいたね。

こんなことは学問の話ではないからなんですけれども、
 ぼく、後で公衆衛生みたいなこと、その統計みたいな
 ことをやって、こういう遭難問題も結局それに通じてい
 る。このときは大学新聞にこういう山の記事をいろいろ
 書いていたの。昭和5年にも「目醒ましい本年の高校山
 岳界」だとか、「1930年山岳遭難の跡」とかいうことで、
 「帝国大学新聞」、まあ東大の新聞ですがね。このころか
 ら、ヒマラヤへ行ったらどうかっでけしかけているんで
 すよ。(笑)

前田 先生一番むずかしい山は……。

瀬木 ぼくはあまりむずかしい山へ行かないんで、理論
 登山家だといわれてます。(笑)

こういう遭難のことだとか、山登りのことで、「山岳史
 の統計」というようなもの、これはやっぱり大学新聞。

前田 この後でこれをまとめられたんですか。

瀬木 まあそうね、これは頼まれて書いているから。

こんなことで、山岳遭難の統計的観察をしておった一
 時代があったんですけれども、これとは別に、私は昭和
 7年に東大医学部を卒業して解剖教室にいて、そこに3
 年いた間におもしろい話があったんです。

この間こういう本(「学思—SEGI'S CAPの再発
 見—」)を出したんですが、これは結局私がこういうもの
 を昭和10年に発見したわけなんですわ。つまり、人間の
 胎児の腸の絨毛の先のところに、ある種の特殊な細胞が

集まっていることを発見して、当時の「解剖学雑誌」に「人胎児絨毛ニ於ケル『クローム』親和性細胞集団ヨリナル特殊構造ニ就テ」という論文を発表したわけ。結局これがぼくの学位論文になるんですけれどもね。

ところが、そういうものをぼくが発見して、これをちゃんと「解剖学雑誌」に発表したんだけれども、40年間だれもそれに気がつかなかったんだね。そうしたら一昨年の11月に、新潟大学の解剖学教室の人が、これは内分泌構造だ、その細胞集団は内分泌をしているんだということを発見して、去年の3月10日、ちょうどいまから1年前だけれども、新潟でお祝いの会をやってくれたんです。「瀬木先生を囲むシンポジウム」というのもやってくれて、その日に晩さん会もあった。

これが昭和10年にかいた絵ですが、これがまだ残っておるんです。ここにこういう細胞が集まっている。これに「瀬木の帽子」という名前をつけた。外国ではまだ知られていないから、いろいろ外国へも紹介したいと思うとるんですけれども。

その発見のいきさつは、新潟大学でぼくの文献が発見されて、それをまた新潟大学の人か5年間かかって、自分の標本で証明すべく追究していたわけ。それで結局、新潟でも見つけたわけね。いろいろむずかしい点があって、なかなかこれはそう簡単にいかないんですよ、ぼくも偶然発見したようなものですけれども。再び見ようと思っても、よっぽど注意してやらぬと、非常にこわれやすいところなんです。

それで、ここにこういう特殊な細胞集団があって、そこからホルモンが出ているということ。ぼくのは、

ホルモンが出ているということはわからなかったんですが、わかる方法がなかったわけ。最近はこの証明する方法ができて、それがホルモン細胞だということがわかったわけです。

こういう本(「学恩—SEGI'S CAPの再発見—」)が最近できたんですが、学恩というのは、藤田恒夫さんという新潟の教授と、小林繁さんという助教授の人が——いま山梨大学へ行ったけれども、発見した。その人たちが、こうやってぼくの昭和10年の発表を取り上げて、いわばいろいろPRしておってくれるわけね。それでこういう会をやったり、こういう「学恩」という名前で、その40年間のいきさつをずっと書いたり、それから電子顕微鏡で見た現在の知見、昔は電子顕微鏡なんてなかったけれども、そういう知見をまとめた。

これはぼくが昔発表した論文の絵なんですけれども、とってもきれいな絵がかかれて残っていた。これは絵かきさんがいて、きれいに書いてくれたんです。

こんな話は統計に関係ないのでなんですが、卒業後3年で解剖教室の仕事は終わって、昭和10年に産婦人科の教室へ入るんです。そうしたら、白木正博先生という人が産婦人科の教授で、当時、慶応の産婦人科の教授に安藤画一さんという人がいたんです。そして、1938年にアムステルダムで国際産婦人科学会が開かれることが予定されていて、安藤画一さんがそこへ出席して、日本の子宮がんの治療とか、いろいろなものの統計発表をする予定だったんです。この安藤画一さんが、東大の病歴をまとめて材料をくれぬかと、東大に頼んできたわけ。それで白木さんが、ぼくにそれをいいつけたわけなんですね。

ちようにそのとき、ぼくが産婦人科に行ったものだから。
前田 先生そのころは講師？

瀬木 あのときは東大の助手になるのに10年かかるときで、サラリーもらうまでに10年かかった。医局にいっぱいいてね。まあ副手といえは副手だね。ぼくはちように学位論文も済んでおったし、何をやってもいいというときだった。

ぼくが、結局、東大の産婦人科の教室にあった子宮がんの病歴を統計的にまとめ、当時の治療成績を安藤さんに渡して、安藤さんが慶応の統計、そのほかどこかに頼まれたと思うんですけれども、そういうものをまとめて、1938年（昭和13年）にアムステルダムへ行かれて、そこで話されることになったわけです。私もちょうどこのときに、安藤さんに少しおくれて外国へ行くんです。

私は1938年の5月に日本を出て、文部省の在外研究員としてドイツへ行ったんです。当時、戦争で日本の外貨が足らぬときで、外国へ行くことは非常にむずかしいときだったんです。それで、結局、研究テーマに、文部省や大蔵省を説得するために、非常時色というか、そういうものがあることが望ましいということになったんです。

ところで白木先生というのは、日本で初めて子宮がんの放射線療法を始めた人なんです。当時東大の産婦人科は、そういう子宮がんの放射線療法の研究に熱中しておったときで、ぼくもドイツへ行って、ドイツのそういう子宮がんの放射線療法を研究してくるというか、やり方を見てくるということだった。

それともう一つ、それだけでなしに、「戦時及び戦後の人口問題」という題を白木さんがつけ加えたわけ。それ

も見てこい、調べてこいというわけだね。戦時及び戦後の人口統計、これが結局、後でいろんな方面に影響するんですが、ぼく自身としては、そのときそういうものを見てくるといふ才覚はなかったんだけど、産婦人科の教授の白木先生が、どうしてそういうことをいったか。これは考え方によつては偉いといえるのかもしれないし、そういう学校の外のこと、学問の狭い範囲外のことを白木さんがいろいろ考えていたというのは、おもしろい話だと思うんです。

それで結局、「ドイツ戦時及び戦後の人口問題」という題で、ドイツへ行って、第一次世界大戦後の人口問題を、人口政策の問題を含めてどういうふうに展開していったか、それは必ずしもドイツに限らず、ヨーロッパのいろんな国も含めてだけれども、そういう問題を調べた。

当時ドイツにはブルグドルファーという有名な人口学者がいて、ナチス的な人口論を展開していた。そういう時代で、ぼくも初めて人口問題の本を、ドイツの国会図書館へ行って、やむを得ずというか、読むことになるわけですよ。それよりちょっと前に、慶応の安藤さんがぼくの調査結果も持って、アムステルダムでしゃべった後で、やっぱりドイツで一緒になりました。当時ドイツにはまだ日本人は非常に少しかいなかったときですけども、一緒になってあちこち見学して歩いたんです。

それでぼくは、ドイツの国会図書館などで人口問題の本を見ているときに、結局死亡統計を見るわけね。そうすると、当時ドイツではがんが死因の2番目なんだね。それが日本では11番目なんです。そういうことをドイツの図書館で初めて見た。それが結局、後で『ドイツの

健民政策と母子保護事業』という本になった。これは昭和14年に書いて、産婦人科の学会雑誌にはもっと早く出ているんですけども、本になったのは昭和19年です。ここにいろいろ“がん”の問題が取り上げてあるわけ。これは昭和13年の見聞の記録ですけども、日本では、当時がんの問題なんかまだ全然無視されていたわけです。前田 これは先生がドイツご遊学中に書かれたわけですね。

瀬木 書いたのは帰ってきてからです、向こうで資料を集めてきて、帰ってきてすぐ産婦人科の雑誌に出したんですけども、こういう本にして、印刷ができたのは、戦時中でおくれて……。

前田 たしか日本にお帰りになったのは昭和14年ごろだったと……。

瀬木 14年8月10日に帰ったんです。これは戦争がヨーロッパに起きる20日ぐらい前です。

前田 そのころは、わが国では結核、結核で、まだ“がん”なんということはあまりいわなかった時代ですね。

瀬木 そうなんです。結核、結核で。

「第11章、癌対策」。いろいろな専門家にこれを見せると、こんな古いときにこんなこといってと、びっくりします。がん対策はまだこのときには……。

ぼくが昭和13年に外国へ行くときに、医局で送別会をやってくれたわけ。そのときに白木教授が、「外国へ行くと日本の将来がわかる」というようなことをいったわけね。いまとはずいぶん違う。そのころはそうだったんですわ。この間WHOが、ぼくのをちょっと紹介した本を送ってくれたんですけども、日本へ行くと世界の将来が

わかると。数年前の人口問題でも過密の状態だし、大気汚染のあれでも日本がずいぶんパタパタッと汚れたときだった。そういう日本へ来ると世界の将来がわかる。しかし、そのときはそうじゃなかった。向こうへ行くと日本の将来がわかる、そういうことがいわれていて、白木さんもそれをいったわけです。このがんの問題については、まさしく的中したんですね。もっとも、的中し過ぎて、来年はがんが死亡原因の1位になるという話ですけれども。結局ぼくは、ここでがん問題を頭に入れるわけ。

ちょうどそのころ、ドイツの26の大学の産婦人科教室を全部回って、昭和14年の2月ごろだったかな、ベルリンに帰ると、白木さんから一通の手紙が来ていた。そのころは大使館気付で手紙が来たんですが、開いたら、「日本に厚生省という役所ができた。それで母子衛生の仕事をしたいといっている。ところが日本にはそういう専門家がおらぬ。知識もないし、人もおらぬ。ちょうど君がドイツにいるから、そっちを見てきたらどうか」という。だから、母子衛生の問題は初めのぼくのテーマには入ってないわけですよ。子宮がんの放射線療法と人口問題はあったけれども、母子衛生の問題がその手紙で追加されたわけね。

つまり、厚生省の人が白木さんのところへ来て、母子衛生の仕事をしたいんだけれどもという話で、小児科の方は宇田川与三郎さんという人が東大の小児科から行ったが、産婦人科の方はだれも行かないし、また適当な人もおらない。そういうわけで、ちょうどぼくに、とにかく見てきたらいいというわけですよ。

当時、日本とドイツは、日独文化協定だとかそういう

ものがあって、とっても関係のよかったときで、ドイツ政府に頼んで、そういう施設を見学に行く手はずをとったわけです。それであっちこっち見物して非常におもしろかった。ドイツのナチスの旗がへんぼんと翻るベンツの自動車に乗って、ドイツをあっちこっち、ただで。(笑) 山の中まで自動車で行って、ベルリンに夜の11時ごろに帰ったこともあるな。途中で剣付鉄砲を持ったのが「Halt!」といって自動車をとめるんだね。そうすると、検閲というかな、調べを受ける。ちょうどその3日前にドイツがチェコに侵入して、そのすぐ近くまで行ったものだから、そこらをうろついているやつを調べるんでしょ。そういうこともあった。それで、いろいろドイツの母子保護事業の施設や政策を見てきた。それがこういう本にもなったわけです。

ぼくが帰ってくると、厚生省にはまだ母子衛生課はないんですが、当時オリンピックが日本に来る予定だったんで、厚生省に企画課というのができたんですよ。

前田 当時は公衆保健局ですね。厚生省、発足はそもそも昭和13年でございましたね。

瀬木 体力局施設課。オリンピックの設備をやろうとして、田村剛さんという造園学の大家とか、栗本さんという、後で文部省の体育局長になった人が体育官という名前でここへ来たわけ。ところが支那事変が進行中で、オリンピックをやるためにはその問題を片づけにやらぬ、結局は両立できないということになって、東京オリンピックを捨てたわけだ。

それで施設課がやることになったわけですよ。名前は

おかしいんだけれども、結局そこで母子衛生事業を始めよう。よう変わるものだと思いうけれども、そういうことで方向を変えたわけね。その課の名前は どうせすぐ変わるんだけれども、人員もそういうことであわった。

どうして変わったか、もう一つ奥の深いところは知りませんけれども、愛知県の一宮で戦後十数年間市長をやっておった伊藤一君という人が、当時厚生省の事務官をやっていて、私のおやじが名古屋で眼医者をやっていたんですが、伊藤君の奥さんがそこに治療を受けに来て、一宮の人だったし、よく知っている。それで結局、母子衛生のことをやりましょうということになったんですね。ぼくのところへ、厚生省へ一遍来てくれぬかということ、結局ぼくは東大に籍を置きながら、厚生省の嘱託として関係するようになった。

前田 お帰りになってからずっとですか。

瀬木 ずっとね。東大では助手をやっていて、昭和18年ごろまでは両方かけ持ちの時代が数年間あったわけ。

かけ持ち状態だったけれども、その間に東大の方では、出産力調査をやることになります。最近も、去年かおとし、イギリスで……。

前田 ワールド・ファタリティー・サーベイのときの、ロンドンの専門家会議には私が行きました。

瀬木 そうでしたね。

とにかく昭和13年に、婦人科学会で出産力調査をやろうということになった。当時、昭和13年と14年は、日本の出生率が減ったわけ。これは、上海事変にわりあい年を食った者を動員した。名古屋港からも軍隊がたくさん行きましたかね。あれが、ほやほやでなしに、30歳ぐら

いのなれた兵隊を動員したらしいね。そのためにそういうことがあって、ちょうど13年、14年に出生率が落ち込んだ。

それで結局、そのときに人口問題研究所なんかもできたんだろうと思うけれども、例の「人口政策確立要綱」が厚生省でできて、「産めよ、ふやせよ政策」がとられることになったわけです。

それに呼応して、日本産婦人科学会が出産力調査をやることになった。実際的には、ぼくにその仕事をやってくれといわれたんだけど、これはなかなかあずかしい問題だね。それでも全国の大学の婦人科が助けてくれて、同じ調査票を配って、どういう子供を産んだとかいうことを調べた。それで適当な結論は出したけれども、あまりこれはという結果は出なかった。結局はむずかしい問題だからね。ただ「そうですか」というような結論しか出ないし、また病人が多く来るし、なかなかいい結果は出なかった。

前田 これは東大の産婦人科が中心で、大学関係だけですか。

瀬木 日本産婦人科学会というのが名目的にはなにして、集計は東大の産婦人科でやり、ぼくが主任みたいな形で、企画と集計をやりましたかね。

前田 そのときデータを提出した大学は全部で何大学ぐらいですか。

瀬木 うーん、あのときは……。

前田 当然そのとき何か報告書みたいなものがまとまったと思いますが。

瀬木 それは木下正中さんという人の名前です。総括的に発

表して、それから各大学の人が発表して、ぼくの名前では何も大したことは発表していないわけ。木下正中さんという元老みたいな人がいて、その人の名前で全国を取りまとめた。これはないしょの話、ぼくが取りまとめたんだけど、結局うまくまとまらなかった。まとまるわけないわね。全国やって足し算してみても、地域によっては意味ないでしょう。老人がしゃべればそれでもいいけれども、ぼくらまだ若かったから、そういう若い者が発表するという人では入れられなかったということです。

木下さんのまとめた報告書は、日本産婦人科学会に出てはいるんですが、結局、やっではみたけれども、何というほどのこともなかった。

前田 東京へ帰りましたら、おそらく人口問題研究所がそろえていると思いますので、人口研へでも行って見えます。

瀬木 そういう問題が1つあって、そのうちに昭和17年7月13日付で、妊産婦手帳規程をつくるわけ。これはなかなか予算が通らなかったけれども、結局そこで妊産婦手帳規程ができるわけですよ。

これは、ぼくがドイツのハンブルクの大学病院で、ある制度を見たんだ。つまり、妊婦が自分の健康記録、メディカルレコードを自分で持ち運んでいるの。何でもないうつまらぬことみたいだけれども、それが重要なんだね。どこで、いつお産が始まるかわからないのに、医者や産婆さんのところだけに記録があるのではいけない。

そういうことと、それから当時、妊娠中に診療を受けるという習慣が日本でまだない。その診療を受けさせる。

そういうことを踏まえたわけですね。これは妊娠中毒症の防止とか、医学的にはいろいろな意味を持つものです。そういうことは、いまでもほとんどだれも理解はしておられないけれども、ぼくの気持ちとしては、あの中にいろいろな産科的な問題が含まれている。それを日本で、あいう手帳の形でやるわけであって、その制度をここでつくったわけだ。このメディカルレコードの問題が、後に統計にも関係の深い問題にもなってきますけれどもね。

この手帳をつくって、どこがうけたかというところ、終わりに配給欄というのがある。この特別配給がとってもうけた。つまり、この妊産婦手帳が一種の妊娠証明書みたいなに取り扱われた。それと配給の方で、つまりぬ配給だけれども、お産のときの脱脂綿だとか、いまあんなことしないけれども、5カ月の腹帯の木綿1反の配給とか、そういうものを配給したという証明。それが役に立って、この制度は、一部の空襲のひどいところではもちろんムダにしたけれども、戦後まで、結果としては1年の休みもなくずっと今日に続いている。

これもいろいろな時期がありましたよ。戦後、昭和21年の予算を取るときが非常にむずかしい時期だったね。あのとき、母子衛生課では愛育会の予算と、戦前からの乳児の体力管理、これは実際上は空襲がひどくなり、敗戦の後でほとんど有名無実になっちゃったけれども、それと妊産婦手帳の予算、これが全部ゼロ査定で来たわけだ。それを徹夜で交渉して、結局妊産婦手帳の予算だけが残った。愛育会も、後では何か復活したんでしようけれども、当時はやっぱり牛乳の配給が必要だったから、それでこの手帳の制度が、21年の予算のときも残存したわけ

ね。

それで、22年にこれは「母子手帳」と名前を変える。これは児童福祉法が22年につくられるときに、ぼくが子供の方まで伸ばしたらいいと考えて、「母子手帳」と名前を変えたんです。このときも東京で、アメリカが来て電気を使うものだから、始終停電になるのね。その停電のところで、ろうそくの光で「母子手帳」の設計をしたものなんですよ。

前田 先生が母子衛生課長にご就任になったのは何年ですか。

瀬木 22年ですね。それまでは、課長は事務官だということになっていたからね。

前田 しかし先生は、厚生省新設の母子衛生課の初代課長。先生が一番最初ですね。

瀬木 そうです。

前田 その設置のときは、法律事務官を課長にすべくスタートしておったわけですか。

瀬木 そうそう、戦前はそうだったからね。大体法科を出た事務官が、厚生省の課長の大部分でしょう。それでアメリカの占領軍が来て、厚生省の者出てこいというわけで、最初に横浜の税関倉庫の焼け跡で、アメリカから進駐してきた軍医連中と会ったけれども、向こうが怒っちゃったわね。結局、法科の人は技術者でなく、何も知らぬから、何もしゃべれぬでしょう。どこの国だって医者がやっていることを、日本じゃ事務官がやっている。それでふざけたようにとったのね。

ぼくがドイツにいたとき、日本に厚生省ができて、優生課長が、埼玉県の経済部長をしてあった床次徳二さん

なんだね。日本の新聞で、この人が課長になったという記事を、ドイツで見たわけね。外国にいと、そういう日本のやり方が不思議なんだ。法学部を出た人がどうして優生課長になるかということ。結局それはおくれてあったわけだけれども、法科の人が順繰りにって課長になれるわけがない。こういう学問的な課でしょう、やれるわけがない。経済とかそういうところならね。

これは話が全然別だけれども、曾田さんが医務局長になったとき、ドンという有名な統計学者がとっても気の毒な感じを持った。また不思議なんだね。どうしてあの曾田さんのような統計の専門家が医務局長にならないか、そういうことが理解できないのね。日本だと、それが役所の出世の一手段と見ているけれども、向こうは専門家主義だからね。10年でもやっているでしょう。位の方は適当に調整していく。日本はそういう局長のようなポジションにならないければ出世ができない。そういう点で、頭が変だといって、向こうが同情しているんだ。日本のやり方をどう解釈していいかわからない。そんなこともありました。

戦争が済んでアメリカが来て、そのときにいろんなことを聞いても、法科を出た人はわからない。聞きかじりで、3年もたつと少し知識を得るんだけれども、しょっちゅうかわっているし、それでアメリカが怒っちゃって、日本の衛生関係の局長と課長は医者にすべしという。それはそうだね。それで、東さん、三木さん、勝俣さん、3人の局長が医者になった。

前田 そうすると、昭和18年に「妊産婦保健指針」をいろいろ折衝したところは、厚生省の人口局の何課が所管

ですか。

瀬木 このときは人口局の母子課ですよ。

前田 そのときの母子課長というのはやっぱり……。

瀬木 母子課長はだれだったかな。しゃっちゃんかわつとるから。2年間に3～4人。

前田 これも法律屋さんですか。

瀬木 そうなんだ。だからひどいのもいたし、いい人もいたし、いろんなのがいた。ぼくも国会へ行くとき、乳児死亡率は何を何で割ってどういう数字だということを、自動車の中で教えてやらにやならぬ。そういう情けない人があった。

「妊産婦保健指針」は、ぼくが書いて白木さんが直した。現物はもっとずっと厚いんですよ。これは要点だけで、もとかちょっと失われた。だけど、こういうものが当時出たのは、おそらく世界じゅうにないだろうね、役所でこれだけ詳しい医学的なことを書かれたというのは。ぼくはこのとき、日本のこういう行政は世界で一番すぐれていると思い、自分でそういう形に持っていったつもりでおったんですね。「母子手帳」でもそうだが。

前田 ちょっとさかのぼりますけれども、白木教授から途中で母子衛生を勉強しろといわれて、それで先生が向こうで勉強されたときに、「母子手帳」の制度と、もう一つ、がんの登録が何かをなさろうということではなかったですか。

瀬木 そうそう、よくご存じで。それもおもしろい話がある。

妊産婦手帳も、ドイツのハンブルグでちょっとセント

を得ただけけれども、このがん対策というのもやっぱりハンブルグで、昭和13年にがんの登録をやろうとしていたわけ。ところが、その登録用紙なんかを持ち帰ったやつを失っちゃったの。『ドイツの健民政策と母子保護事業』には一部印刷しておいたわけですがね。そして3年ばかり前、あるドイツのまだ若い医者だったけれども、オーストラリアに留学しての帰り道、日本にぼくを訪ねて来たわけですから。それでがんの登録とか、いろいろな雑談をしたんですが、この本(「Klinisches Krebsregiste und Standardisierte Dokumentation」)を、つい1週間ばかり前に送ってきたんです。これはその人の、ハイデルベルグ大学の医学部の博士の学位論文で、「がん対策と環境」、いろいろながん登録問題を導入したものを1冊書いたわけだけれども、自分の国の昔の登録用紙を載せるのに、ぼくがコピーしたものを使っていた。

前田 自分の国では無く、先生のこれから写したわけですか。

瀬木 そういうわけですね。

ドイツというところは、どういうわけかがん登録が発展しないし、がんの疫学もわりあいにおくれている。ぼくのこの『ドイツの健民政策と母子保護事業』も、ドイツ語に直して向こうで紹介してくれるといいんだけど、うまくいかない。

なぜかというと、ドイツ人というのはgesetzlich Botといって、法律上の禁止事項というのをとても守る国民なんだね。公園へ行ったらどこへ行ったら、すぐ「禁じられている」という標示がいっぱいある。どうすることは禁ぜられているとか、バスの運転中に運転手に話し

かけることは法律によって禁ぜられているとか、そういうことを始終使うし、またそれが守られている。が人の登録も医者への守秘義務に触れるというわけだ。しかし、よその国ではやっているんじゃないか、ドイツでも昔はやろうとしていて、いまはやってない、そういうことが博士論文になっているらしいんだけども。

それで妊産婦手帳の方の問題は、結局いまいったように……。

前田 先生が母子衛生課長にご就任になって「母子手帳」ですか。

瀬木 そうそう、昭和20年ね。そのときにちょうど児童福祉法をつくることになって、あのときは戦争直後で、徹夜して法律をつくったの。日比谷の森に朝日がだんだん上ってくるところも覚えている。あそこで児童福祉法の原案をつくった。そのとき、子供の方まで手帳を伸ばして「母子手帳」とするということだね。

瀬木 それからフェルプス氏 (Leonard V. Phelps) との出会いになる。最初に会った日は、向こうはよく覚えているんだが、「フェルプス氏を訪ねて」にも書いてある昭和21年5月としておきます。

昭和21年の5月に、目黒の厚生省で、アメリカのシビリアンというか、普通の背広を着た人が、軍服を着た日系人の通訳を1人連れていて、はしご段をおりてきてパツとぶつかって、「MCHはどこだ」と聞くんだね。それで「MCHって何だ」と聞いてたら、「Maternal and Child Health (母子衛生)」というわけ。「母子衛生なら自分のところだ」というわけで、そのときは三木さんが課

長だったけれども、その部屋で禅問答が始まるわけよ。

死産届は母子衛生上重要な問題で、死産は母子衛生にとって重要だと思わないかというような話から、それは重要だと思うと。「それじゃ届け出の規則をつくる気はないか」というんだね。それはおもしろいかもしれぬというわけで、それまでも死産統計は日本にあったんですよ。あったけれども、医者あるいは助産婦が、胎児の埋火葬許可証というものを手に入れなければならず、そのために死産証書というものが要求されていたわけだ。それはおそらく、厚生省の何か通達みたいなものだと思いますがね。

そういうわけで、正規の死産届け出の規則はなかったけれども、死産統計というのは前から存在していたわけですね。法規的にははっきりしない死産証書をもとにして、死産統計というものが、かろうじてあったことはあったんです。ところが、人口動態統計の5つの届、つまり出生、死亡、死産、婚姻、離婚、この5つがアメリカではそろっているのに、日本では、とにかく死産については正規の法規が存在しなかった。だからそれをつくってはどうかという。そのころは、そういう母子衛生のことはみんなぼくに任されていたものだから、相談する人もいない。当時そんなつまらぬこと、みんな忙しいことをいっばいやっているときで、あまりまだだれも興味を持たなかった。

勝侯さんが局長ではあったけれども、5回ばかりフェルプスが訪ねてきて、それで死産届け出の条文をつくるわけ。大体アメリカの方法をもとにしてつくった。だから、いま死産届の規則をごらんになっても、死産の定義

というのが、生まれ出た子の脈搏が存在しないとか、あるいは随意筋の運動、呼吸運動が存在しないとか、そういうかなりバタ臭いというか、あるいはある意味で科学的といえますか、普通の条文とはかなり違った表現がとられている。アメリカの方法をかなり採用した。フェルプスがアメリカの本を早く見せりゃ、こっちも簡単にいくんだけれども、こちらには見せずに、下でこういうふうに見ながら、「こういうのはどうだ、こういうのはどうだ」というから時間がかかった。

あのころ一番むずかしかったのは、占領軍の人間とこっちとがどういう関係にあるのか、それが何にも規則がないんだね。どういうところまでこっちが従わねばいかぬのか。それは大局から見れば、戦争に負けて、プログラム何とかで命令に従うことにはなっているでしょう。基本原則としては従う義務があるのかもしれぬけれども、やりとりの過程でどれだけ否定できるのか、そういうことはわからないときだったね。あるところでは向こうのいうことを聞かにやいかぬし。

だけど、結局フェルプスと死産届をつくった。そのときに、出生証明書をまたつくることになるわけね。いま人間が生まれると、出生証明書に医者か助産婦が書き込むわけね。出生届—出生証明書、それから死亡届—死亡診断書、それから死産届—死産証書、みんなこういう対になっているわけね。つまり、届けにはメディカルレコードが付随するわけ。これはいまはそういうふうにそろっているんですけども、日本では出生証明書の制度は戦前にはなかったんです。アメリカにはあるけれども、アメリカはむしろ戸籍がないから、出生証明書が日本の

戸籍みたいな役目までするわけね。それでアメリカでは、出生証明書というものは一生涯持つておらなければいけない。あんなもの1枚の紙切れなのに、長いこと持つているのかね。汚れてるだろうと思うけれども。

それで、日本でもそういう出生があったときは、本人の届け出のほかにメディカルレコードをつけよう、ぼくはそう考えたわけです。ところが当時は、総理府から来た人たちと厚生省と、戦後の人口動態再建の委員会をつくっていたわけ。そこでぼくが、こういうものをつくったらどうかと提案した。そうしたところ、そのときはだれも積極的に賛成する人もないし、反対する人もないんです。それでぼくは「反対なし」とフェルプスにいったわけ。反対がなきゃそれで結構、通すということになって、その委員会を通ったことになった。それで出生証明書のあんな規則を厚生省でつくって、厚生省令として出したわけです。ぼくが自分で、やっぱり停電のときに設計して出した。

けれども、5年ぐらいたって仙台へ行ってから、厚生省から電話がかかってくる、あれは戸籍法で出生証明書を出すことが規定されていて、法律根拠という場合戸籍法しかないんだ。あとは人口動態のあれはあるけれども、結局戸籍法で出生証明書は決められている。どうして厚生省が告示で、単独に出生証明書を規定するのか、けしからぬではないかと法務省からいってきているというんですね。「そうですか」といって、結局共同告示にしたでしょう。何もこっちは、そんなことで向こうにかかわることはない。向こうが勝手に後で戸籍法に取り入れて書いた。厚生省で発生したものとは全然別で、戸籍法の根

拠法規ではないんですよ。しかし、後から根拠法規を探れば、そこにパッとそういう字が出ているでしょう。そういうふうなこともあったね。

ぼくとして非常に残念なのは、そんなことより出生届に書かれている、出生直後の母と子の健康状態という欄が削られたことだね。法務省に移ったとき、そんな医学的な薬臭いものはやめるといって削られちゃった。ぼくとしては、これは「母子手帳」との関連で非常に保健上は重要なもので、結局出生証明書でも、つくる時は保健上の目的でつくっているんです。何も事を複雑にするためにつくったわけではない。それを保健衛生のために役立てる、その1つの手段なんだ。

つまり、それが保健所へ出るでしょう。そうすると、保健所がその記載を見て、すぐそれに対して反応を示すことができる。そのために、母と子の健康状態というものが記入されねばならない。それから体重ね。体重も、いまとなっては、体重を届け出る国は世界じゅうで日本だけですが、体重の方は削られずに済んだ。体重をそこに書き込むことにしてあるので、これが根拠になって、体重統計として役立っているんです。

ただぼくが感心したのは、ここにも少し書いてありますが、フェルプスとのやりとりの過程で、たとえば死産証書には産業と職業の別を書き込むことにしてはどうかという点だ。産業分類と職業分類、両方書くことにしたんだが、いまそれはどうなっておるかね。

前田 削られていますね。というのは、私が在任しておったときに、法務委員会がいろんなものを全部削ろうとしたんです。私どもが必死に防戦しまして、結局5年に

1 遍 国調年次だけ残すようにしたんです。死亡届も、過去 10 年間で最も長い従事期間を持った職業を書くことから、届け出時前 1 週間の就業内容を書くように改められました。

瀬木 まあいいけれども。これはなかなか困難な話だからね、実際は。それはまあ削っても……。

前田 いや、残っておりますよ。国勢調査の年は、父の職業、母の職業。国調以外の年は世帯の主な仕事、これ残しております。ですから、要するに専業農家とか、兼業農家であるとか、あるいは自営業であるとかいうような形ですね。

瀬木 初めのときははっきりパッと出ていたわけ。たとえば放射性物質をつくる工場があったとする。そこでタイピストをやっている。銀行のタイピストと、放射性物質の工場のタイピストとでは、おのずから死産に対する関係が違ってくる。だから、そういう意味で、産業と職業を分けることが必要になる。

それで、そのとき放射性物質という字を出したことに、後からぼくは感心しているわけ。それは前の年、20 年に、原爆が落ちましたよ。しかし、まだ日本人はそういうことあまりわからない。それはレントゲンもやってあったから、ぼくはやっぱり多少なんだけれども、マサチューセッツの工科大学を出た男が、医者ではないんだけれども、そういうのが、こういうところへ書いたらどうかという積極性を示したことに感心した。

前田 そうすると G H Q 側の意見だったわけですね。

瀬木 G H Q の意見だったか、フェルプス個人の意見だったかわからぬけれども。

それからもう一つ、死産届の証書、当時、最初的时候は厚生省で印刷したの。それで山の様に積んで、全国に送り出そうとしていたら、突然フェルプス本人が来て、梅毒の血液検査をしたかせぬかということを書き込む欄をつくったらどうかというわけね。そんなこといったって、いま印刷して発送する間際じゃないか。それで1日、2日暇があるから、スタンプを押したらどうだろうという。ぼくは趣旨としては賛成だ。しかし、いまここでやりとりを個人的にしていいかどうかはとにかく問題がある。そのときはそういうことできたんだね。血液検査の結果は問わない。やったかやらぬかということ聞いたらどうか。ぼくが「あんた、なぜそういうことを考えたか」というと、「そういう欄をつくるのが母子保健のために有用ではないか。つまり、血液検査を受けるという宣伝になるんじゃないか」という。そういう届け出を利用して宣伝に使うことは、ぼくは結構だと思って、じゃ、やりましょうということで、それから10ばかり大急ぎでスタンプをつくらせて、みんなでかわりばんこに押しては発送したんですよ。

梅毒の欄は、いまはなくなっと思うね。それは当然なくなるべきで、そのときは、まだ梅毒が多いときだった。それから、梅毒の薬もまだろくにできてない時代だったからね。それは、いまは当然削られているでしょう。

瀬木 ぼくに関した個人的な問題がちょっと入り過ぎたけれども、そこで大きな問題は、人口動態統計を総理府から厚生省へ移したこと。それは曾田先生が一番本論を

やられたんですけれどもね。

結局役所というところは、戦争があったといっても、所管しているものはなかなか手放したからないわけで、総理府の統計局から、衛生統計、人口動態部門が厚生省に移ったというのは、これは歴史的な問題なんです。その前に、昭和21年でしようね、アメリカ側がそういう集まりをやれといったから、総理府がいやいやながら主宰して人口動態再建委員会を開いて、総理府で当時そういう統計をやった人、それと厚生省側で死因分類なんかに興味を持っていた者、ぼくもそこへ入っていたわけですけれども、渡辺定さんとか……。

前田 丸山先生もメンバーに入っておられたんですか。

瀬木 丸山さんは入っていないのと違うかな。丸山さんはそういうごたごたが済んでから来ましたからね。あの方が来られたのはかなり遅いから、おそらくそうだと思いますが、ぼくもはっきりは知らない。

前田 少なくとも、先生がいまおっしゃっていた委員会みたいなものは……。

瀬木 まだ曾田さんすら、初めはおられなかったかもしれませんよ。曾田さんは、調査課ができる時に来た。

前田 衛生統計課ができて、すぐにはお見えにならなかったですね。ちょっとおくれて衛生統計課長になった。

瀬木 だからぼくはよく知らぬ。ちょっと忘れました。曾田さんも見えなかったかもしれない。渡辺定さんは確かにいましたけれども。

当時、そういうところへ行って、別におだちんくれるわけでもないし、何のためにアメリカのところへ行かにゃならぬのかという気持ちはみんなあったわけで、行く

と、キャメルのはたばこだとか、チェスターフィールドだとか、フェルプスがいつもワン・カートンを持ってくるの。それで、たばこをばらまく。たばこ戦術だね。みんなそれにつられた。そういうたばこはまだ珍しいときで、のむやつも、のまぬやつものんで、そこで戦後の人口動態の再建の問題が論議された。

ここで話が全然違うけれども、森山（巖）さんという人がいて、ぼくがこの森山さんを初めて知ったのは文献で、昭和22年ごろ母子衛生課長のときに、アメリカの乳児死亡率の本を読んどって、そこで森山さんという人が文献上活躍している、それを知ったわけですけども、この森山さんが、ちょっと違うけれども、アメリカで曾田さんみたいな立場だったんだね。アメリカの中央政府では、最も上まで行った日本の役人なんだ。アメリカの統計局長とでもいいいますかね。そこまで行って、ぼくもしばしば接触持っていたんだけれども。

その人に最近聞いたんですけども、アメリカでは、デパートメント・オブ・コンマース（商務省）でこういう統計をすべてやっていたわけ。ところが戦後、あるいは戦時中かもしれないね、デパートメント・オブ・ヘルス・アンド・エデュケーション（教育保健省）に人口動態統計が移るわけ。

それを、フェルプスは日本で同じことをやらせたわけ。裏があることは、そのときみんなあまりはっきり意識しなかったけれども、約2年前に、アメリカで同じことが行われた。そのときに、アメリカではそれについていったのが森山さんですね。そして、アメリカと同じことをなにして、日本で結局、総理府からこっちへ移

す仕事が行われたわけね。それはアメリカの一声で移せといわれて、だれもあまり大した反対はなしに、すんなりと終わったわけ。こういうことは、ああいうアメリカの声がなければとてもできなかったことだろうと思います。

前田 しかし、当時局長であった森田優三先生は、あれだけの大きな事業がほかの省へ移るんですから、ずいぶんつらい思いをされたみたいですね。

瀬木 しかし結局、世界一流の人口動態組織になっていたわけ。これはやっぱり、厚生省へ移したからだね。総理府に置いては、あれはできませんよ。知識の向けどころが違うから。厚生省は医学的なあれも非常に強いところだし、仕事の内容がそうだから。

いま、日本の人口動態統計は、完全性から見ると、とにかく世界でトップかもしれないね。そういう状況に行っているのは、やはり移ったからですね。厚生省としても、受け入れたからにはなにせにやいかぬというあれがあったし。曾田さんがあそこにかんばって、初期のころ基礎づくりをされた。とにかくああいう専門家がこっちにいてやったから、できたことだとは思うわけ。

それで、こっちへ移す前に愛育会の基準とかでいろいろ論議をやっていたんですが、人口動態戦後再建委員会、それから厚生省に調査課ができ、三木さんが曾田さんを推薦して、曾田さんがいいということになって、課長になって来られるわけね。

いまの死亡診断書とかそういうものの形式の問題が済むと、今度は死因の統計分類の最初の作成の仕事が始まるわけね。これは21年ですね。

前田 これは、回としては何回になるんですか。

瀬木 6回か5回か。5回と違うかな。

前田 20年が6回です。40年が8回、50年が9回。

瀬木 戦争なんかあってゴタゴタして、ちょっと乱れている。日本のが載りかけたのも、流れの途中のとき、昭和22年に入ったわけですね。

前田 6回になるわけですね、昭和30年が7回とすれば、先生がいまおっしゃっているのは20年ですね。

瀬木 21年の話だね、あれをやったのは。

前田 6回ですね。あるいは、あの辺続けてやれば5回かもしれません。

瀬木 一番古いやつが出て、何か続けてバパッとやったんですよ。それで箱根にこもってね。前田さんはあのときまだでしたね。

前田 私は23年の秋でございます。

瀬木 そうですか。そうするとここへは入っておられない。

小田急のロマンスカーというやつ、ぼく初めて乗って、何人かそろって箱根へこもって泊ぐらいした。十数人でいろんなものを持っていった。

最初にやるべき仕事は、日本のいろいろな病気があるでしょう、疥癬だとか、日本語のわけのわからぬ病気がある。そういうものは、いまは死亡診断書に書く人はなかろうと思うけれども、とにかくそのころは、起こり得るすべての病気をどこへ位置づけるか、それを考えなければいけないので、日本独特の現象が起きる。それは日本に限らずよその国でもそうだと思うが、独特の陰語というか、通俗語というのか、医学的なきちんとした名前

でない通俗語があって、そういう病気はどこへ落ちつけていいのかわからない。別な範疇で締めくくって病気の名前がつけられているわけだから、そういうものを、こういう名前が書かれたときは何番に入れるんですよという索引をつくったわけね。その仕事をやった。結局インデックスづくりですわね。それを箱根で3日間こもってやった。そんなこともあったね。ああいう仕事も珍しい。

瀬木 それから昭和23年に、第1回の公衆衛生学会というのが、公衆衛生院で開かれたわけね。そのときに、ぼくは厚生省の統計書にあらわれているがんの統計をまとめて、最初の発表をしたわけですね。戦後最初のがんのデータです。

その前昭和17年に、人口学会でぼくがちょっとがんの統計をしゃべったときに、戦時中でもあったんだけど、「いまは結核の時代である。そういうがんの話なんか、のんきなことを話してもしようがない」といった人があった。そういう時代だったんです。それから戦争もひどくなって、もちろんぼくもがんのことはやっていなかったけれども、23年に初めて新しい戦後の数字が少し出かけたわけね。それで23年の公衆衛生学会で、初めてがんの統計をしゃべった。その学会長の田宮猛雄さんという人がいて……。

前田 その後がんセンターの総長になられた先生ですね。

瀬木 そうだったね。あの先生が、「これからはがんの問題も重要になるから、しっかりやってください」とか、そういうことをいっておられたな。

前田 このとき先生の用いられたデータソースは……？

瀬木　もちろん、日本の人口動態統計です。死因統計ですね。

　　ちょうどそのころに、曾田さんが2回ジュネーブへ行っておられるんだわね。その年次が23年と24年か、24年と25年か、そこらですが、1回は大臣についていった。つまり、日本がWHOにオブザーバーとして復歸を許された、それで行かれたと思うんです。そのときに、外国へ行くんだけれども、何かデータはないか、配ってくるものはないかということはいわれたものだから、日本のがんの統計を、当時の本当に汚いわら半紙に謄写版で刷って、10部か20部曾田さんに渡したわけ。ところがそれを曾田さんは、後から考えると非常に適切なところへ配ってこられているわけね。

　　曾田さんは、結局WHOの人口動態統計部門と接触をしてこられるわけ。そのころイギリスのストークスとか、フランスのドノワーとか、デンマークのクレムセンとか、そういう後でがんの疫学の方で有名になってきた人たちが、WHOの人口動態の方の委員をやっていたようですね。ことにストークスなんか関係を持っていた。そこへ曾田さんが日本から行かれることになった。アメリカのドンとか、英国のストークスとか、こういう連中がみんな後でがんの方で名前を売り出してきたけれども、そのころは人口動態にいたんです。これは不思議なことだったのね。がんの疫学統計で後で名を売った連中が、結局人口動態統計のことに興味を持っていた歴史を持つ。ほくもそうだったけれども、おもしろいと思います。それをきっかけに、曾田さんがデータを配ってこられたところとの、いろいろな文通が始まることになります。向こ

うから、日本のがんの統計のいろいろなことを聞いてきたり。

そうこうするうちに、昭和25年にオックスフォードで、がんの地理分布に関する世界最初の国際会議が開かれるわけね。国際会議は、その後毎年のように開かれることになるけれども。こういうことで、戦争が済んで初めて、がんの問題についての国際的な取り上げというものが、オックスフォードで行われた。そして、イギリスのドルであるとか、アメリカのドンとか、イギリスのストークスもまだ健在であつたし、デンマークのフレムセンとか、あるいはアメリカのヘンセルとか、何人かの人がここへ出ている。

日本はまだ、残念ながら連絡がないときだったね。しかしそのときの報告書は、ぼくのところに送られてきた。それを見ると、日本のような国からの資料の提出が望ましいということが書いてあった。日本とサウスアフリカが書いてあるんだね。サウスアフリカは、統計は存外発達した国ですけれども、いまはWHOから疎外されていて、WHOへやってこないけれども。

そうすると27年に、今度曾田さんが世話役になって、WHO主催の西太平洋地区の人口動態統計のトレーニングコースが、東京で開かれることになるんです。そのとき、森山さんがアメリカ側から来ております。

ぼくは、そのとき、がんの国際統計を初めて話すわけです。それを英文にしたものがまた各国に行って、あれが、事実上日本のがんというものを外国に紹介した最初の英文印刷物なんですね。あれは、われわれとしては、外国と比較したんだけど、外国の目から見れば、日本の

がんが初めて自分たちと比較の上で……。

イギリスのがん学会の雑誌に、それで初めてイギリス人が日本のがんの姿を知ったと次のようなことが書いてある。

「1952年WHO主催の西南太平洋地域人口動態トレーニングコース並びに1954年第5回国際地理病理学会（ワシントン）において発表された瀬木博士の癌統計は、日本の癌の姿を、西欧諸国のそれと比較可能の計算において、はじめて世界に紹介したものであった。この統計によって部位別の日本の癌の率は西欧諸国のそれに比し並外れて高いか、または低いものが多いということが、比較数量的に明示された。英国ストークス博士（Dr. P. Stocks: British Journal of Cancer, 1956. Vol. 10 p257-264）」

前田 先生が東北大学へ行かれたのは25年で、その間、統計調査部においてになりましたね。

瀬木 23年の4月から。

前田 それで私が先生のご指導を得て仕事をやった期間がありますが、前田との触れ合いもおっしゃっていただかないと……。統計調査部期間のお話と、東北大学に移られる前後の話をちょっと聞かしていただいて、また27年以降の話に続けていただくことにして……。

瀬木 結局、ぼくがアメリカとトラブルを起こすわけね。そんなことは書いていいかどうか知らぬけど、妊産婦に1日1リットル水を飲むように指導せよと、アメリカはいう。一体どうしてそんなアメリカらしからぬ変な要求をするのか。聞いたら、本当は牛乳がいい。ところが、当時日本に牛乳がないから、水だというわけだ。

それでぼくは、いろんな東京の著名な産婦人科の医者にも聞いた。聞かなくてもわかっていることだけど、いろいろ聞いたら、みんながけしかけるんだ。当時アメリカに負けてしゃくだというので、国粹主義の産婦人科の医者、いまは亡くなったかもしらぬが、浜田病院の小畑さんとか、もちろん亡くなっておるが、日赤の久慈さんもそうだった。後でその人たちはみんな日本医師会の会長をやって、アメリカと論争して、医師会長をやめている連中だけど。

それで、そんなものは蹴れ、科学的な根拠はない、かえって有害だというわけだ。それはそうだ。水を飲ませれば、妊娠中毒症なんか悪くなる。牛乳は一応いい。カルシウムもある。ところが、牛乳がないから水だというバカな——これは不思議なんだけど、その後、こっちもアメリカと深く接触するようになるんだけど、アメリカの知識としてそんなことがあるわけない。

これは書いてはちょっと困るが、保健婦のオールトという中佐か小佐か知らぬ、ナースですよ。ナースの人は神様みたいに思っているから、けなしちゃいかめけれども、ああいうところから出た知識なんだね。それで蹴ったら、すぐあくる日、アメリカの司令部からの「やめさせよ」という指令なんだ。

ぼくの後では近藤宏二君が課長になって、あの人の時代に、妊婦に1日1リットル水飲むように指導せよという印刷物を配ったね。いまでも古い保健所に残っているところがある。近藤宏二君は結核の医者だから、ぼくと違って無責任なことをいっておればいいんだから、のんきなものだけど、こっちはやっぱり専門だから蹴ったわ

け。

そのとき三木さんが、統計調査部にしばらく行ってあったら、アメリカもそのうちに帰るだろうからといった。それから曾田さんが、ぼくの兄貴と東大のときに1級違いでよく知っていたし、そんなこともあって、曾田さんのところに避難したというかっこうで、23年の4月に移るわけですよ。

移って、そこで仕事としては、例の衛生統計年報の編集。あのときは、曾田さんがまたぼくをあそこで課長にしようと思って、だいぶ長いこと司令部と交渉するんだ。だけど、アメリカの方ではダメだといった。結局、ぼくは何もアメリカのおるところでなりたいことはなかった。曾田さんは一生懸命交渉した。そういうわけで、ぼくはあそこに避難して、遊ばせてもらっていることになる。

そのときに、衛生行政統計の仕事をやるようにといわれたんだけど、ぼくはあれに責任を持たされた形になっていた。それをだれもはっきりぼくにいつてくれないんだ。それで校正や何かもいいかげんにやってあって……。

前田 あれは、私が23年の9月に入りまして、衛生年報といいましたか、衛生統計年報ですか、紅色の表紙のやつですが、私と西君とで、瀬木先生のご指導を受けながらいろいろやっただけです。

あれがうまくいかなかったのは、瀬木先生ではなくて私の責任でして、私があれはいいかげんに……。

瀬木 あれはだれの責任でもないんで、だって、まだ地方の県庁の文書、いろんな記録が存在しないときで、ぼつりぼつりとあちこちの県が復興してきたときだから、

あのときは、だれがやってもああいうものしかできないんじゃないんですか。地方まで行って、全部催促するわけにいかぬものね。

前田 でも、チェックはだいぶしたんです。たとえば、各県から報告してくる墓地面積を……。

瀬木 そういうことあったかね。

前田 あるんです。例の埋火葬に関する法律を持っておりましてでしょう。だから、墓の面積なんかの報告もあったんですね。一つのお笑いぐさですけども、墓地面積を私は全部そろばんで加えたんです。どうも値が大き過ぎるんでチェックをしたら、日本の全面積の3倍ぐらいになるんですね。(笑)

瀬木 100万平方キロぐらいになる。

前田 それは先生ご記憶であるかどうかわかりませんが、困りまして、先生にどうすればよろしゅうございますかとお尋ねしたことがあるんです。

それから乳牛が何頭いて、牛乳の搾取量がどれぐらいあって、処理量がどれぐらいあってという報告もあったんですね。ところが、全然乳牛を飼っていない県で、牛乳の搾取量が幾らと出てくるんですね。牛がいないのに乳だけしぼられているということになっているんですが、どうしたらよろしゅうございますかと、これも先生に伺ったことがあるんです。あのとき、先生にどういうふうにご返事いただいたか覚えておりませんけど。

ですから、あれは少なくともあの当時、統計調査部では、瀬木先生がいわゆるキャップで、私どもがつかうならきやいけないことになっていたんですね。私はそういうふうになぜられたんです。

瀬木 そう、曾田さんがはっきりいわなかったんだね。

前田 私は課長から、瀬木先生の命を受けてちゃんとつくれよと命ぜられました。

瀬木 何かぼくのミスがあったかもしらぬけど、そのところはっきり……。

前田 それで何か曾田先生にしかられたとか何とか、いつかおっしゃっておられましたね。

瀬木 そう、ミスが多くて。ぼくは、ぼくが責任を負っておると思わなかったものだから。しかし、あれは無理な仕事なんだ。何もあのときにお墓の面積とかそんなこと、十分な根拠があってやっているわけでもないし。それは大変ご迷惑をおかけいたしましたね。

前田 いいえ。しかも、あれは何の取り扱いのルールもありませんし、マニュアルも何もなかったんです。それで私は、これはいかぬと思ったので、1年かかって、現在の厚生省報告例の必携の原案をつくりました。

瀬木 すべて戦争直後の混乱の中から、また前のことをやろうとして、しかも、あれに対しては、アメリカからの何の指令も結局は来なかった問題ですから、そういう問題は、ある意味ではかえってやりにくかったね。やりやすい面と、やりにくい面があったと思うんですよ。

しかし、戦争直後のああいう混乱のときで、もうそういうものをつくろうというあれは、よく復興してきておったんだね。

前田 それで先生が東北大学教授に出られたのが……。

瀬木 25年の、結局向こうの発令は7月ぐらいでしたか。東北大学としては、初めは曾田さんに来てもらいたいというので、あそこの教授会では曾田さんをなにしてきた

んだけれども、曾田さんはちょうど衛生統計部長になられたばかりのころでもあり、アメリカとの問題で、当時とても出れる状況でなかった。それで、東北大学の教授会にぼくをかわりに推薦したわけね。教授会でやり直して、それならというのでぼくの方をあれしたわけですよ。

また、ぼくはドイツのことをいろいろ書いたものがあるって、『ドイツの健民政策と母子保護事業』もそうですが、ほかに『ナチスの人口医学』とか、当時やっぱりドイツのことを書いたりすると、国粹主義を鼓吹したとか、本がいろいろ審査される。それでちょっとひまがかかって、3カ月ぐらいおくらせて、25年の8月に東北大学に行きました。

前田 あのとときに、福島一郎さんが助教授でお移りになった。あのととき助教授がいなかったんですか。

瀬木 もちろん何も無いから無いわけですよ。だれもいるわけないでしょう。

前田 東北大学公衆衛生学教室が新設され、先生は初代の……。

瀬木 あのとときは、公衆衛生教室というのは、全国の大学全部、戦前にはなかったです。戦後はやっぱりアメリカの指令で、公衆衛生教室を大学の医学部につくれという指令が来たわけですよ。それで大体昭和25年から30年の間に、全国の大学の大部分は、少なくとも国立大学は、公衆衛生教室をつくりましたね。それでそっちにぼくが行ったわけですよ。それで結局がんの疫学統計の方に……。

前田 さっき先生がお話しになった27年当時は、すでに東北大学に行ってからのお仕事になるわけですね、がんの国際統計は。

瀬木　　そうです。向こうへ行ったら、まずがんのレジストレーション、登録を宮城県でやろうと考えたわけです。これは昭和13年にハンブルクに行ったときに、さっきの申告用紙を手に入れて、それからやはりがんの罹病率というものを、死亡率だけでなしに知りたい。そのことは、当時みんなが考えることで、その罹病率、発生率でもいいですが、インシデンスを手に入れるためには、まず全国的ながんの罹病調査が、あるいは申告制伝染病みたいに申告制ができればいいけれども。

　ただ、むずかしいことは、伝染病の統計をいじくっている限りではあまり気がつかぬことだけれども、パッと死ぬ病気の伝染病は一番始末がしいね。人間一生涯に1回しか死なないから、10日ぐらいでパッと死んでくれるものだと、その同じ人がまた来年かかるとかそういうことはない。ところが、がんはずっと続いているでしょう。だから、有病率の問題と発生率の問題は、結局1例1例調べていかねばならない。ある届け出があっても、それが新患者かあるいは旧患者か。だから、がんの統計というものは、フォローしていかねばならぬ。そういうむずかしさがある。つまりアイデンティフィケーションの問題で、結局何年前にどこから出た人と果たして同じかどうか。そういう問題が、がんの調査にはしょっちゅうつきまとう問題ですね。

　それは住所も同じ、名前も一緒、年齢も一緒なら、一緒になりましようけれども、そういうのが微妙に違ってきたりするとき、そういう問題があって、なかなか複雑な問題を含む。それから違った県からの入り込み、出ていく問題、それをオピュレーション・ベーストといいま

すか、人口に基礎を置く発生率、死亡率、これは病院だけでやる病院統計なら簡単だけれども、そういう人口に基礎を置く統計というものは、完備したレジストリーを置いて、そこに非常に熱心な人が何人かいてやる必要なわけです。

それを宮城県でやろうと思って、昭和27年ぐらいに、宮城県のがんレジストリーを東北大学の公衆衛生教室の中につくるわけです。これもなかなか反対があって、やっぱりおくれた一番の原因は、宮城県の医務課長が強硬にがんばって、やらせまいとするんだ。例の守秘の法律とどうなるか。医者では自分の取り扱った患者の秘密を守らねばいけない。その問題をどうするんですか、それが解決できなければとって。

前田 医務課長はドクターじゃないわけですか。

瀬木 医者ではない。そういうことはしゃっちゃんぶつかる問題だ。それがかわるまで待っておらねばならぬということになった。強硬に頑張るから。

後は東北大学に持ってきて勝手にやって、実際はそんなことに医務課は関知しない。しかし、事が起きたとき、それは医務課が監督不行届ということになるのかもしれない。

それでミヤギ・キャンサー・レジストリー（宮城県がん登録機関）というものが、もちろん日本では初めてできた。それから日本では大阪にもでき、岡山も特殊な方法で罹病率を発表しているんです。岡山はレジストリーを置かず、年1回問い合わせ調査でやっている。これは無駄のない方法ではありますけれども、多少不完全になる。いま日本では、その3地区だけです。

それからもう一つ、ぼくの方でやった大きな仕事は、がんの死亡統計書です。アメリカのがんの研究雑誌「Cancer Research」(1974年10月号)の表紙にも、私とその統計書の写真が掲げられています。それは「Cancer Mortality for Selected Sites in 24 Countries」という6冊の本で、24カ国の中央統計官庁と連絡して、がんの死亡のデータを1年1年取り寄せて、訂正死亡率の計算をした。それで1950年以来2年ごとに1967年まで出してきたんです。その途中で「Cancer Mortality in Japan」のような付随的な印刷物も出しています。これによって、結局世界じゅうのがんの比較が初めて可能になったわけです。

この間(1980年8月)、国際ガン登録協会で表彰されたわけですね。簡単な表彰ですが……。

前田 これは本部はどこですか。

瀬木 どこということはないですが、いまはノルウェーです。

前田 各国が回り持ちみたいにして、そのときの当番国とか……。

瀬木 そのときの会長とか何かによって、はっきりした事務所はないんだ。

ここでぼくを名誉会員に推薦してくれた理由の一つも、この統計書なんです。私の表彰理由は、次のようになっています。

1. 東北大学公衆衛生学教室内にミヤギ・キャンサーレジストリィを設け、日本で最初の県域がん登録を行った。(成績発表最初年次1951年)

2. 現在がんの年齢訂正発生率、訂正死亡率計算に広

く用いられる人口構成「瀬木人口」を作成した。

3. 東北大学の教室の時代（1950年）以来、がん死亡の国際統計書を継続作成し、がん死亡率によるがんの地理・年次差異を初めて明らかにした。

4. 世界がん登録関係者の最初の会合を提案し、第1回東京会議（1966年）を主催、この席においてIACR（国際がん登録協会）の結成を提案した。

それからこの「Contrary to Nature」という本は、発行がアメリカの厚生教育省で、ミカエル・シムキン（カリフォルニア大学教授）がつくった。「Contrary to Nature」という意味はちょっとわからないんですが、要するに世界のがんの研究の歴史の本なんです。その中の「International cancer statistics Segi and Doll」という項で、私とリチャード・ドルを紹介しています。ドルは、がん登録機関から送られてくる罹病統計から、「Cancer Incidence in Five Countries」という本を書いた。この中にも、もちろん日本では宮城県だけの数字が入っています。私の方はがんの国際統計書のシリーズです。

前田 がんの国際統計については、瀬木先生とドルという先生がおられるということですね……。

瀬木 こういうふうに世界で死亡統計を出したということが評価されておるわけなんです。これは1950年から67年までこういう形でつくって、後、こちらへ来てから、70年からこういう形で毎年1回ずつつくっておるわけです。（「Age-adjusted death rates for Cancer for selected sites (A-classification) in 46 Countries in 1975」）だけど、これはWHOの報告をもとにして、A分類でやっています。

前田 先生がいつか、なかなか国がうまく合わなくて、発表されているときもあれば、されていないときもあるからと、組み合わせに苦勞しておられましたね。それはこのお仕事ですか。

瀬木 そうですね。これは数が多いいから。

前田 24カ国は直接その国から取られるから、毎年きちっと24カ国そろっているわけですか。

瀬木 それでも、やっぱりときどきおくれる国はあるね、そういう時代でも。結局、後でさかのぼって入れる。あるときには、急げば欠ける国ができますね。

前田 それからいつぞや、私がまだ厚生省在任中にお手伝いさせていただいた細かい地域別、部位別のものは、いつごろから……。

瀬木 前田さんに主としてお世話になったのは、市郡別、部位別に2回にわたって取りまとめたわけですね。最初のときが「市郡別・選択部位別癌特殊死亡率指数（昭和35年、40-42年）」の取りまとめだったですね。第2回が「癌死亡統計 明治33年～昭和29年」です。

前田 最後のときは、先生がちょうど3月31日付で「退官になる」というので、あれは何日でしたか、先生があと1日か2日で「退官になる」ときに、仙台に駆けつけて、やっと間に合って。

瀬木 それが「わが国の市郡別がん死亡率の疫学分布」になっているんですが、ここではあっさり「たまたま瀬木・青木らによって前記のものとは別に、新たに昭和44年～46年の3カ年間の同様なデータが、未発表ではあるがすでに作成されていることがわかり、（中略）このデータを分布図作成の資料として採択した」と書かれてい

るので、ぼくは安西氏に文句をいってやったんです。「採択した」とは失礼ではないかと。(笑) 人をバカにしておる。いかにも役人めいている。1文のカネをくれるわけじゃないんだけど、採択とはねエ。だけど、向こうは感じないんだね。役人をやっていると、そういう字に不感症になるんだね。もう少し感謝するとか、言い方があるんじゃないですか。数字のもとには厚生省の方から出ているんだから、こっちも強くはいえぬけれども、そういうこともありました。

市郡別のがんの統計というものは、昭和33年ごろに東北大学で平出君という人が初めて書いて、それをだんだん発展させて、2回にわたって前田さんの多大のご協力を得て、市郡別のがんの死亡統計をつくったわけですね。

なぜこんなことをするかというと、結局、いまがんの原因を探し出すには、一見非常にムダの多いように見える仕事を積み重ねながら、その中から何か役に立つものがないかということを探らざるを得ないと思うんです。それでここから生まれたものの1つは、奈良県、和歌山県、茶がゆと食道がんの研究なんです。食道がん死亡率市郡と、50歳以上教職員・配偶者のうち「かゆ食」の習慣のある人の割合の高い市郡とが一致するわけです。こういうことから、茶がゆと食道がんとが関係が深いということが初めていわれるようになったと思うんです。こういうことも、市郡別のデータを出さないとわからないことです。(「ガン予防への道」64～67ページ参照)

ここでやっぱりわかったことは、山口県の大島郡というところは、この地方でここだけ食道がんの全国平均の4倍と高いんです。もちろん奈良県は高いんです。高い

ところがかたまっている。それと茶がゆ習慣のある者の割合を、学校の先生1万人ばかりのところへ問い合わせを出した。年をとった先生について、昔からの茶がゆ習慣があるかないかということを知りて、それのある者の割合の地図が非常に一致するわけです。

ところが、私、あるとき、ちょうどたまたま乗り合わせたタクシーの運転手の人から、どっちから話が出たか忘れたけど、自分の郷里は大島郡だ、そこでは茶がゆをとるというんだね。大島郡が高いということは、ぼくは市郡別統計で知っていた。頭の中にあつた。それでびっくりして、すぐその保健所の人に問い合わせたりして、確かに茶がゆをとる。そこが、中国地方ではぽつんと茶がゆをとる地区で、またそこがぽつんと食道がんが高い。そういう珍しい一致がある。それでいまでは、ここの地域の一致とかそういうことで、茶がゆというものが食道がんの原因だと、ぼくは信じているんです。

前田 茶がゆをとるというのは、要するにおかゆというのは一時的ではなくて、どろどろしてありますから、熱いのがそのままずっと食道を通過していくから、そのためのびらんというか、熱のためかと私は思ったら、いつか先生、それよりもむしろタンニンの化学変化だとかおっしゃっておられましたね。

瀬木 そうですね。タンニンは熱いときに作用するもので、たん白質と結合する。そのたん白質と結合するものが、がんを起こす原因になるんです。タンニンは、冷たくなるとたん白質と化合しない。熱い状態では、たん白質とも結合するし、金属とすら結合する。だから、熱いという条件が必要ではないかと思ひます。

前田 タンニンは皮が何かにも……。

瀬木 なめすのにも使う。それも熱い状態でやるんでしよう。たん白質を固まらせる。

前田 そうすると茶がゆが影響を与えるとすれば、熱いお茶もよけい飲んではいかぬということになりますか。

瀬木 それは微妙なところで、いま、その点で攻防戦というのか、静岡県なんか茶の産地が多いでしょう。そういうもので神経過敏なんだけど、静岡県の方では、いま逆宣伝に出ておるね。茶は安全だという。大した根拠はないけど、危険だというほどの根拠もない。茶がゆは、普通のお茶とずいぶん違うんです。非常に濃厚にして、しょっちゃん飲むし、やけどをするような熱い状態なんです。だから、お茶がどうだということはちょっといえませんね。安全だともいわないけれども。静岡県は、日本で胃がんも食道がんも低い土地なんです。

前田 かゆは、京都も多いようですけど。

瀬木 大島のかゆは、京都などのかゆと全然違う。お茶の中で濃厚に煮る。それをまた温めてやけどするぐらいで、とても濃いお茶で煮るわけです。普通の意味のかゆとは違うようですね。

前田 いま食道がんのお話を伺っていたんですけども、部位別に見て、食道がん以外の他の部位については、何かお話しいただくような特色はございませんか。

瀬木 それはいっぱいあるんです。たとえば胃がんなんかは、秋田県から山形県、新潟県、そっちの方に高い市郡がいっぱいある。乳がんなんかは、やっぱり東京だとか長野県、神奈川県とかそういうところに高いとか、分

布を見てこうだということはいえるわけです。それがどういう原因がそこに結びついていっているかという問題はなかなかわからない。ぼくは結局そういう研究をするための基本資料を提供しておるわけです。それから食道がんの場合のような、こういう理由ではないかという理由が見つかってくるといいと思うのです。そういう意味で将来の研究者に、資料を残しているわけです。

ところが、大体こういう統計というものは、どこにどういう資料があるかということが、なかなか後の人にわからない。そういう欠点を持つ。たとえば昭和30年ごろに、平出君というぼくの教室の人が、市郡別のがんの地図を書いているんです。それは「東北医学雑誌」という東北大学の雑誌に出しているんですが、そういうものはだれも読まないんだね。それでほかの後の人が、たとえば釈山政子さんなんて、そういうものは全然無視しているから、地図なんて日本ではだれも書いた者はないとか書いている。これは無視しているわけじゃないんで、調べようとしないうのかもしれないけれども、調べるいい方法もないんだね。

結局、われわれだって、そういういろんなことをやるときに、大阪大学とか岡山大学とか、そういう学校のすべての雑誌にまでさかのぼって調べられぬ。いろいろな雑誌に分散して入っているから、われわれが立場を変えて見ても無理はないんだ。だから、結局調べようとしないうし、また調べるいい方法もないから、日本でだれもそういうことまではやっていないといっでよい。

だから、将来、純然たる数学的統計の方法論については、何かそういう雑誌があるだろうけれども、こういう

衛生統計みたいなものは、厚生省の統計調査部の雑誌があることはあるけれども、あれに載るのはごく一部だから、何か総目録があるといいと思う。そうしないと、あっちこっちに発表したものが死んでしまう。利用されずに済んでしまうわけで、釈山さんなんかでも、われわれのところからいっぱいそういうものは出ているんだけど、外国のことだけをだれがどうしたこうしたというだけで、国内のことは紹介しておられない。そういう手段がないともいえるわけだ。

さっきの「瀬木の帽子」のあれでもそうなんです。結局「解剖学雑誌」というのは一番権威のある雑誌なんで、そこへ載せたんだけど、それでも解剖学者さえ見てない。日本人でそういうものあまり見ないのかしら。そういう習性がある。見ても、日本人同士あの人やった、この人がやったということも、あんまりいいたがらぬという人もあるね。ぼくにはよくわからぬが。

前田 私、社会保障研究所ができましたとき、厚生省から3年ほど勉強してこいと言われまして、初代の所長が一橋大学の山田雄三先生だったんですが、先生はしょっちゅうそれをいっておられましたね。何かしつ始めるときに、それに類する先行業績があるかないかを十分時間をかけてやりなさい。そうしないとムダになるよ。それから場合によっては、その先生方のおやりになったことを自分でよく勉強して、どこに問題が残っているのか。そうすれば、それは跡づけの方法に変わるんです。調べて本当にないときに、初めて自分が手がける始源的な研究になる。むしろ、そういうことに大いに時間をかけなきゃいかぬ。何でもかんでもいきなりパッと始めること

は、研究者として一番いけないことなんだ。多くの人たちの先行業績というものをよく基礎にして、その上で歩かなきゃいかぬということをよくいっておられました。

私は、山田先生のご薫陶を3年も受けたし、学者でも研究者でもありませんけれども、かなり業績を調べますね。お訪ねしてお願いすれば、教えてもくださるし、資料も貸してくださいますね。やっぱり新聞記者や刑事と同じで、足を運んでお訪ねしなきゃダメですね。

瀬木 それはそうだけど、それがだれだってことかまず見当がつかぬといかんね。

前田 一つには、最近その辺あんまり分化し過ぎているんじゃないでしょうか。だから、見当もつかない。大学あたりでも、昔は内科の教授は1人しかおられないのに、このごろは第一内科から第六内科とか、あまりに専門分化し過ぎていますから。

この間もちよっとほかのことで、名古屋の医学部を出た人に会いまして、要するに恩師はだれかと聞いたら、昔はわかるけれども、いまはそれぞれ分化し過ぎているから、大ぜいおられてわからぬといっておりましたね。昔は、名古屋の医学部の内科の教授は1人だから、これでわかるけれども、いまはぐっと分かれているから、ちよっと違えば……。

瀬木 研究分野が分かれちゃうから。

前田 先生、さっきおっしゃったように、基礎データを提供しても、あんまりその後を受けて……。

瀬木 実際は、この市郡別のデータは単行本で出したから、雑誌には残っていないわけだけれども、単行本でもきわめて限られたものだから、これを利用するとい

う可能性はなかなか少ない。

将来は、やっぱりこういうものがやたらにたくさん出て、その中で本当に有用なものが1つ2つポツンと見つかっていけば、それはそれでいいと思うんですよ。そういうためにつくっているんだから。しかし、この市郡別データによっていまの地図もできたし、これを見て、また将来何か考える人があるだろうと思う。

食道がんのそういう拾い物というか、それは偶然ぶつかったわけですから、がんとはそういうものじゃないかな。無限にムダがいっぱいあって、その中で何か1つポツンポツンと、そうやっていま探りを入れて、その中でも食道がんが拾えればそれでもって瞑すべしというものかもしれませんね。いろいろ苦心した無限のデータのうちから、1つポツンと生きるものがあれば、それはそれでいいという考え方もある。これをやったからといって、いろんながんの原因がパーツとすぐ出てくるとは思えない。あずかしいかもしれませんね。

結局、IACRの先ほどの表彰理由に、大体私のがんの方の統計でやってきたことの大部分が書いてあるんです。

瀬木 それから1960年代には、「ハワイ日系人の胃癌・大腸癌疫学調査報告」の仕事に熱中しておったんです。

前田 それを少しお聞かせくださいませんか。

瀬木 これは1960年代に、かなり大規模な調査を、アメリカの国立がん研究所のヘンセルと共同でやったわけですよ。

どうして1960年代にやったかということ、結局1924年に、

アメリカの排日移民法案というのが、お聞きになったことあるか知りませんが、排日移民法案と日本では違っていたんです。つまり、日本人はもうこれ以上ハワイへ移民してはいけないという法律が出たんです。そこで、ハワイ移民はストップを食ったわけですね。そのとき20歳代で行っている者が、1960年代にみんな年齢が来て死んでいくわけですよ。あとは、その人たちが何こうで産んだ子供、2世は大きくなってきつつあるけれども、1世として1924年までにハワイに渡った者は、1960年代は70歳台に到達する。

ちようどとんとん死にかけるときで、また、がんになる者も多いわけです。その時期を見て、サッとがんを調べよう。露骨にいうと、結局そのときこそが重要な時期だ。後でしまったと思っても、もう実情がつかめない状況になってしまう。

それでアメリカがん研究所のヘンセルがこっちに共同研究を申し入れて、それからぼくがアメリカへ行ったりして調査票をつくって、60年代に350人ぐらいの胃がん患者、250人ぐらいの腸がん患者の統計的な食物調査をした。これのいろんな個票や何かの設計は、日本から私も行ったし、助教授の栗原君というのもアメリカへ行って、何カ月かおって向こうと共同してつくり、結局日本語の入った調査票だった。ハワイの日本人というのは、日本語しかしゃべれぬ人もまだいる。しかし、またそういう人でも、食べ物なんかは一部英語でしゃべるとか、また英語しかわからぬ人もいる。同時に、これは1世だけでなしに、2世の人でも若くしてがんになる人がやっぱりあるから、そういうものも一緒に調査したんです。

それを向こうで、がんにならなかった日系人と、統計的方法で食べ物比較をした。何人かの日系人がインタビュアーになって、胃がん患者三百何十人の自宅へ行って、いろんな家の人に聞いたり、腸がん患者も同じようにした。どういう食べ物は好きだったかどうだったか、食べたかとか、そういう調査をした。

こういう移民のがんの研究というものは、世界的にはアフリカからアメリカへ移住したニグロ、これは非常に大規模でだれでも知っていることだ。あとポーランドからアメリカの北部へ移民している。それからまたノルウェーからもアメリカへ行っている。そういう移住に伴うがんというのは、環境が違ってくる。それから食べ物がまた、違うときと違わぬときとある。日本からハワイへ行くような場合は、行ってパッと向こうの食べ物にしてしまう人もあるわけだが、日本の食べ物習慣をずっと固執している人もある。アフリカからアメリカへ移ったような場合は、アフリカの食べ物習慣は捨ててしまうんです。それはサンゴヤシがアメリカに生えておるわけでもないし、アフリカ的な食べ物はすぐ離脱するわけだ。物は悪いものかもしらぬけれども、アメリカ人的な食べ物に移る。

ところが、日本からハワイに行く場合は、そこがいろんな段階になる。日本の習慣を保持し続ける者とそうでない者、そういうことで、この移民のがんは、移住に伴ってどういうふうに変化するか。世界的にその研究が要望されていたときに、非常に特殊な、研究しやすい材料として、これは一つは日本の国内のがんの統計が整備されている。それから行った先でも、やっぱりアメリカで

統計が相当しっかりしている。そういう背景があるわけだ。ふえた、減ったという比較が可能である。

それでこれをやりまして、食べ物で結論的にいうと、後述のような結果が出たというわけなんです。おそらく世界のこういうがんの疫学調査でも、ここまで出たものはほとんどないですね。これはいろいろなところで、われわれも日本国内でやったし、アメリカでもやりましたけれども、国内調査では、こういう統計的有意性のある結果は得られていません。(ハワイ日系人、胃癌・大腸癌患者疫学調査・食品別相対リスク参照)

たとえば塩乾魚は、胃がんに関しては、月4回以上とる人と全くとらない人を比べると、1世は危険率が3倍、2世は2.6倍、これで統計的に有意だという。これにはヘンセルのヘンセル・マンテルの方法というむずかしい統計の計算の方法が使われている。それは疫学調査方法論の本に書いてありますが、コンピュータ計算はこれはワシントンでやりました。調査はハワイで行い、そのカードを持ってきて、個票のパンチカードは仙台でつくって、また航空便でアメリカへ送り、そしてアメリカの国立がん研究所で電算計算をしたんです。これは現地で使った調査票です。

それで月4回以上乾魚をとった人は、全くとらない人に比べてこういう危険率、塩魚だけだとこうだ、塩乾魚合計。それから日本漬物が、日本大根(たくわん)を月21回以上とる人は、全くとらない人に比べて2.7倍というように、統計的有意性がある。

それからおもしろいのは、その下の西洋野菜が、みんな安全食品になってくる。1を割っていますから、安全

食品として登場しているわけですね。こういう安全食品がわかったということもおもしろいんです。

いまは、日本の癌研究所の杉村さんたちも、別の観点から、ビタミンCがどうか、こういうことをいっておられるようですが、こういう調査ではこういうことが出ているわけです。

右側は大腸がんの方で、大腸がんは全く別で、肉類をたくさん食べるとかかりやすい。それから豆がどうして出たかはわからないんです。説明はつかぬけれども、豆類がやっぱり同じように出ている。でん粉食品もこういう結果になってきている。

前田 ここに出ていない食品群は、あまり関係がないと思っていいんですか。胃がんと大腸がんでは、摂取食品群が……。

瀬木 全然違うでしょう。違うところがおもしろいんで、ここに書いてないのは、ほとんど有意の差がない。ここに統計的有意性が出ているでしょう。そういう有意性のあるものは、ここに全部書いてある。あとは有意性が検出できなかった。

こういう興味ある結果が出たのは、おそらくこの調査だけじゃないですか。日本でも、アメリカでも、イギリスでも、一国内の普通の調査はやってきているわけです。ところが、みんな失敗しているんですね。なぜかという、そういう一国内調査では、胃がんになった人とならぬ人の比較では、これはという結果が出ないんです。

どうしてこういう移民について調査結果がはっきり出たかという、つまり極端な差がある。たとえば日本から行って、日本漬物を全然食べてない人がある。すぐ絶

縁しちゃう。しかし、日本にいたときよりもっとくどくどく——日本ではいまどんどん変わってきているけれども、日本の昔の習慣を一方では維持して、昔ながらの生活をしている人がハワイにはいるわけです。そこで、この結果、広い幅の比較ができてくるわけです。そういうことがわかったわけです。肉でも、ほとんど食べておらぬ人から、アメリカ人並みに食べる人まで、いろいろある。

日本人はこんなことをしても、漬物なら漬物を調べても、日本人はみんな五十歩百歩食べているんです。それである人はがんになるし、ある人はならない。それは偶然的な感受性の違いだと考えられるわけです。それで一国内調査というものが、あまり役に立たぬという結果が出たんです。そういう点で、これは非常に重要な結果だと思っ

前田 大変素朴な質問なんですが、そうすると胃がんの方は、肉類はほとんど有意差はなかったと読める……。

瀬木 そうなんです。

前田 大腸がんの方は、ずいぶん1世と2世の差がありますけれども、これは何が原因が少しわかってい

瀬木 1世がいつ食べたかというのは、現在で調べている。ところが、結局こういうものは人生の蓄積なんですね。だから、1世の場合は、日本におったときは肉は食べてないわけです。向こうに行ってから、比較的最近食べかけたんでしょう。いま食べるものといえども、結局は一生涯で食べた肉の量とえば、1世の場合は少ない。2世は、比較的生まれたときから食べている。それでこういう差が出てくるんだという説明もできるわけです。

だから、20年前の食べ方も調査しようとしたんですよ。調査票にはそれを書き込む欄もあったが、それはうまくいかなかった。忘れている人もおるし、供述が不正確だから。

60年代はこういう仕事をやっていました。

前田 先生は東北大学は25年から……。

瀬木 46年までです。ちょうど9年前です。

いまここでは、毎年1冊ずつがんの国際統計の印刷物を刷って、それで各国へ何百冊か配付している。千何百冊刷ります。

もう一つは、Mizuho Library of Health Statistics (瑞穂国際保健統計ライブラリー) と、これは大げさに書いているんですけど、結局、この部屋の一角にある本です。あれは見たところ何でもないので、ヘルスライブラリーになっているわけです。日本じゅうにこれだけのものはないのです。統計調査部には交換で幾らか送ってくると思うけれども、くちゃくちゃになるでしょう。ここだけが整理されている。各国の死亡統計書、それは政府刊行物が多いんですが、整理されてる。いま、あれだけの国で、死亡統計書を出しているわけです。

これは、普通の丸善なんかが取り扱うコマーシャルな本だと、黙っておっても何こうから広告をよこすけれども、こういうものは決して広告をよこしません。それぞれの国で、発行所の事情が違ふんです。本屋も違ふし、ただでくれるところもあるし、くれないところが多いですが、そういうところはどこへカネを送るとか、幾ら送るとか。それである年にわかってそこへ送るでしょう。

そうすると本が入る。それで来年は向こうは何もいってきませんから、また同じときぐらいになって、どうだ、1年たつけれども、今度はどこへ幾ら送ったらいいとか、そういうことをこっちからしじゅう聞かねばならぬ。それが国々によって違います。ある国は、幾らかカネを預けておけば向こうでその中から送ってくれるところもある。そういうことを、ここでやっているわけです。

まだ、そんなに古くありません。数年前からやっているんですけれども、多少はさかのぼって集めたし、もちろん前から、このかんの国際統計書をつくるときから、これと交換でくれるものはずっとくれています。そういう図書館をやっているわけです。これはちょっと類がない。これは広島大学なんかにも送って、栗原君のところも、向こうでコピーをつくらせてこれでやっています。そういう仕事も、副産物的にやっています。大部分は政府刊行物です。

前田 曾田先生にこの前お目にかかってお話を聞いた限りでは、当時、総理府統計局の森数樹さんが、内閣統計局の技師をやっておられた。たしか大正7年に、東大の数学を出られたのはお1人だけだそうです。

その森数樹先生をお呼びして、曾田先生は、10回にわたって統計学の講義をやっていただいたそうです。

瀬木 何年ごろかな。

前田 社会医学研究会という名でお呼びしたようですね。

瀬木 大正14~15年ごろかな。

前田 曾田先生はちょうど東大の医学部におられた。その後は、小倉金之助先生の本で自習をした。それから倉

数の労働科学研究所に行っ て勉強したとおっしゃっていました。それで先生は一番最初に、郵便配達夫の適性検査のようなことを、統計技術論的にはやったとおっしゃっておられました。

このひそみにならうと、さっきの先生のお話を伺うと、ドイツ留学のときに、戦時及び戦後の人口問題から、結局は人口統計というか、死亡統計に入られたということでしょう。ごさいますか。

瀬木 そうね。それと統計という、何も学問的な意味じゃないけれども、子宮がんの統計は、結局その後疾病統計の方へ入ってくる、そのもとをつくった。

それからちょっと前後して悪いですけども、東北大学で病院統計というのをつくったんですよ。

それからいまちょっと話をするのを忘れたが、1954年にワシントンで、第5回国際地理病理学会というのがあった。そこでは5つの部位のがん、乳がん、子宮がん、肝臓がん、肺がん、胃がんの国際的な疫学調査、つまり調査票を各国に配って、そして各国から回収して、それを乳がんはだれだれがまとめる、胃がんはだれだれと、そういうまとめる人を向こうから頼んで、その人に報告してもらう。

それで、ぼくのところで乳がんをまとめてくれといわれて、これは昭和23年にフランスのドノワーという人が来た。ぼくは直接それまで知らなかったけど、曾田さんはどこかで会ったことがあって、曾田さんのところへ手紙が来て、ぼくに会いたいといって、東京で会ったんです。そうしたら、結局1954年（昭和29年）にワシントンでそういう趣向でがんの地理病理の会議をやるから、ぼ

くに乳がんをまとめないか。その奥には、日本に乳がんが少ない。だから、日本からの研究が役に立つ可能性があるし、ぼくに各国のやつをまとめさせようとした。

それから向こうからいろいろな調査票が来て、肝臓がんなどのほかのところの日本の調査を依頼された。それで日本で最初のがんの疫学調査というものを、昭和27年の終わりごろから28年、29年とやるわけです。そのときは、日本の厚生省で行った——といっても、厚生省からはカネが出て、実際はぼくの方で集計したんですけれども、最初のがんの疫学調査です。

結局、その学会で調査票にどういう回答が寄せられたか。これはオランダの学者が、胃がんだけの部門で採点した。いろんな調査票の項目にうまく書かれているのが○、なおよく書けているのが◎。大部分の項目はよその国はあんまりまじめにやってなかったが、日本は○の数が28あって、◎は9つのうち5つを占めるという成績をとった。（「あめりか訪問記」産婦人科の世界第7巻参照）日本だけがまじめに対応したということになって、よその国がちゃらんぽらんをやったということになる。それで、日本のこういうことが評価されたわけだ。それに伴って、日本の最初のがんの疫学調査をやることになった。

前田 29年のワシントン会議に出すために、27年から調査活動に入られたということですか。

瀬木 日本のデータが初めて出て、それが非常によくできていたという評判だったんです。（「あめりか訪問記」1956年2月号93ページ参照）

前田 このこともあり、先生はその前からすでにいろいろな資料のストックをして、この種の研究に従事してお

られたわけですね。

瀬木 それで急にこの仕事をするようになった。2年ばかりかかって、日本のほとんどの大学から調査票を集めて、この地理病理学会に対する回答書、日本の調査結果をつくったわけです。

それでスイスへ送ってやったら、ベストのレポートをくれたが、よその国はさっぱりダメだという手紙が来た。

これが日本のがんの疫学調査というものが、初めて国際的なところへ出た機会なんです。いまは平山君などがやって、いろいろ外国とも交渉しているようですが……。

前田 最後に少しお伺いしたいのは、先生自身がいろいろ統計分析とか統計のお仕事をされるのに、どういう先生にどういうことで接触して、あるいは教えを乞われたか、あるいはどういう人と一緒に仕事をされたかということ、年次的に……。

瀬木 ぼくのところは、やった仕事が本格的な統計じゃないものですから、曾田先生のような本格的な統計は何もやっていないんで、申しわけないんですけど、仕事の上では、むしろ統計の先生というよりも、たとえば東北大学でがんの疫学を始めるときは、いろいろな人が協力してくれた。たとえば後の東北大学の学長の黒川利雄先生（現在巣鴨の癌研）、それから吉田富三さん（元東大医学部長）、このときは、みんな東北大学の教授をしていた。

前田 吉田先生もやっぱりがんですね。

瀬木 後で癌研に行ったが、東大の医学部長で、吉田肉腫というので世界的に有名な人です。

東北大学の外科の教授で、胃がんの方の武藤完雄さん、

これは先輩じゃないけれども佐藤春郎さんとか、がんの統計をやるときにはこういうがん学者。

教室では、栗原登君と福島一郎君。福島一郎君の方が先輩だね。

前田 いま栗原さんは……。

瀬木 広島大学の教授。昔は藤咲^{すけ}運君、いまは東北大学の病院管理の教授をしている。それから斉藤俊保君。当時、助手をやっておった。こういう人が初期のころに手伝ってくれた。

産婦人科のさっきいった安藤画一さんとか、白木正博さんとか、産婦人科の統計をつくるときには内藤勝利さんとか、この人は原爆でなくなったんです。亡くなる前は東大の婦人科の教授だった。

もちろん曾田さんは、ぼくの上司に当たるんですけども、統計そのものはぼくは不得手だし、理論はだれからも習ったわけではない。そういう統計について研究をしたわけではない。こういう数的に簡単な処理で……。

ハワイでアメリカと共同にやったときも、ヘンセルというのが、やっぱりぼくに対する影響が一番大きいですね。外国では、いまいった一連の、要するにぼくを戦後の外国の学会に呼んでくれた人たちですね。ストークスは、イギリスのWHOの人口動態の有名な指導者だったね。昔はイギリスが抑えておったから。後でがんのことも始めました。

前田 ストークス先生は、WHOにおられたわけですか。

瀬木 WHOにおったわけではなくて、イギリスのレジスタージェネラル（登録局）からWHOに派遣されていたわけです。後で、顧問みたいになって、WHOにおっ

た時代もあります。

それから米国のドン、これも大物だったです。デンマークのクレムセンとか、そういう人たちが結局外国の方に引っ張り出してくれたものですから、いろんな人と知り合いになって、昭和30年代はしばしば外国へ行った。そこでWHOの上村一夫さんの世話にもだいぶなった。あの人はリッパな人で、シンポジウムなんかのときに横にいて訳してくれた。

イギリスのドルからもだいぶ教えられることが多かった。

前田 さっきお名前の出た館先生とはどういうことで…

…。
瀬木 館さんは郷里が四日市の人で、直接知り合ったのは、昭和13年の人口問題政策確立要綱からです。あのときの中心人物ですから、まだ若かったけれども、あれを引っばっていった。

戦後は、ああいう機敏な人だから、すぐまた新しい人口問題に入っていかれた。また、そこで、ほくら婦人科の方の医者も、新しい優生保護法の時代になっていく。戦後、子供を産むなという方向になっていく。そういう人口問題の転換する時期に、館さんは数字的なあれで引っばっていかれた。

産婦人科の医者もそうですよ。戦時中の産めよふやせよの時代から、産むなという時代、人工妊娠中絶とか、いろんな時代をパッと切りかえてやってくるし、人口の理論の方も、結局はそういう変化が必要なわけだ。それを館さんは——とにかくあの人は人口問題のピカイチですね。

結局、村松稔君（国立公衆衛生院）が、ぼくの方の母子衛生課に来たことが……。あれは石垣純二が、東大をことし卒業する学生で、いい子を1人連れてくるというわけだ。女の子でも連れてくるようなことをいって、そんないい子がいたら連れてきてくれといったら、村松君を連れてきた。それで話をして、母子衛生の仕事をやったらどうかということ、母子衛生課に落ちつくことになった。ところが、彼は英語が達者なの。戦時中に、東大の医学部の学生をやりながらどうしてそういうことができたのか知らぬけれども、軍事裁判の通訳をやっていて、通訳の正面に出たわけではなくて、その裏の仕事かもしれないが、幾ら戦時中でもよく学生のときにできるものだと思うが……。

それで、ぼくは、昭和20年の終わりと21年にかけて、司令部に行って交渉するとき、いつも一緒に行ってもらって、通訳の仕事をしてもらった。

村松君は、結局、ぼくが母子衛生課をやめるときに、マッコイさんというロックフェラーの上の方の日本駐在員が、公衆衛生院に部屋を持っていたので、マッコイさんの係みたいなふうにかわって、じきにアメリカに行くことになった。そしてアメリカへ数回行って、そのうちに、向こうの博士論文を通して、ドクター・オブ・パブリック・ヘルスになっていくわけですね。その過程で人口問題のことに興味を持った。しかし、館さんは純粋の理論統計家だが、村松君の方は医者だから、生物学的な色彩の強い家族計画の方に入っていくことになります。

村松君はいまもその仕事をやっておるし、いまも毎年1回ぐらいここへ来ますよ。この間も、中国の家族計画

のグループを15人連れてここへ来ました。また来月の23日にも、東南アジアの人が15人ぐらい来るわけ。

どうしてそういうのが来るかというと、昔はよけい産むようにという目的があって、「母子手帳」ができたわけだけれども、いまは中国なんか1人しか産んじやいかぬというんだね。だから、1人しか産んじやいかぬなら、ますますそれを健康に育てることが片一方で必要だ。死んじやうとゼロになる。だから、そういう意味で「母子手帳」が重要になって、少なく産んでうまく育てるという考えが基本的に必要になる。そういうわけで、家族計画の国際協力財団が東京で講習をやって、受講した人を地方へ出すわけですが、どこかに拠点がないといかぬ。ところがそういう人はあまりいないものだから、ここへ来て、毎回ぼくの「母子手帳」の話を聞いていくことになっているわけなんです。

いろいろなことがあるんですよ。さっきの帽子の話もあるしね。

前田 先生の学位論文の中の図、これは（「瀬木の帽子」日本医事新報2918号より抜粋）カラーですけれども、これとほとんど同じ図を先生がご自分でかかれたわけですか。

瀬木 これは自分じゃない、絵かきさんがかいたんですよ。自分じゃとってまかけない。顕微鏡見て、話し合って、ここかいてくれとかいろんなこといつてね。しかもこれは半模型図だから、多少相談して、「こういうふうにかいてください」といつて。

ところが、これは運命だね。ぼくは戦争中にいろいろなもの取られちゃって、貴重なものほとんど全部なく

なっちゃったけれども、この絵の一式だけは、どうぼうが持っていないので、40年たっても原図がきれいな色で残っていたというわけ。

前田 どうぼうにやられたのですか。

瀬木 あのときは、いろいろめちゃくちゃだったんだね。疎開先で取られたり、名古屋で倉へ入れておいたら取られたり、着物だとか何とか。ところが、こんなものはだれも持っていないわ。どうぼうが、ちゃんときれいに残しておいてくれたわけ。持っていって、そこらでほかしてくれたらおじゃんだったけれども。この記録が一式あったものだから、これの印刷ができたんです。ところが、この間これを久しぶりに出して、ちょうど日の当たるところに置いといたら色あせちゃって。今日では原画は色あせて、いまはこの印刷の方が貴重になっています。

これ(「瀬木の帽子」再発見への道)、いま山梨大学の人が送ってきたの、ぼくは見えないんだけど。前にもいったように、この小林繁さんという人が、いまは山梨大学の教授をしているんですけど、新潟大学の助教授をしておって、1975年に新潟大学の図書館で、ぼくの古い文献を偶然見つけたわけ。

まだ一般に知られていませんけれども、これは医学的にはかなり重要なもので、そういう消化器官に新しい内分泌構造があるということは、1869年にランゲルハンスという人が、ウィーンの大学生だったけれども、膵臓にインシュリンを出す細胞があり、顕微鏡で見ると、それがかたまって島のような形になっているのを発見して以来、こういう消化器官に内分泌細胞の集まりがあるという報告がない。だれも見つけてなかったわけ。だから何

十年ぶりかで、そういう新しいことが見つかったということ。日本でぼくが発見して、その再発見がやっぱり日本で行われたことは、珍しい確率ですわね。ぼくは、外国でまただれかが見つけるかもしれぬと思っと思ったんだけど、この人が見つけた。

それで、いまお手元に渡したプリントは、去年の11月の6日に、名古屋へ来てもらって、私の方の学校で記念講演をやってもらった。それを向こうで印刷にしてくれて、いま送ってきたんです。これはやっぱり、この人の学問的な道筋で行って、そしてぼくの細胞にぶつかるわけね。自分の学問的な知識がだんだん乗って行って、こちらの材料との接点に入ってきて、そして瀬木の論文を見出した。

それで、この1年間はこのことで忙しかったんですよ。「学恩」という本をつくったりね。そういうものは胎児だけにある独特な組織なんです。もちろんそれは、いままだどういうことかわからぬけれども、これからの研究で……。羊水というもののの中に胎児は浮かんでいる。その羊水の中にジオキサイドの細胞や何か、いろいろなものが浮かぶわけね。妊娠中に、胎児はそれを吸い込んで、胎便というものをつくる。そのために、胎児の腸管がのみ込み運動をしなければいけない。そしてそういう汚いものを、腸の一部にため込む。要するに、胎児の環境保持の方法なんだね。そうでないと、はがれた細胞の汚いもの、浮遊物が入ってくるから、それをきれいにする。ちょうど電気掃除機の原理と一緒にだね。電気掃除機って、吸うところにはほこりがたまってしまうでしょう。ああいうふうに、胎便が妊娠中に形成されて、生まれると、それがゴ

ソッと外へ出てくるわけ。そういう仕掛けになっとるの。そういう仕掛けの1つの腸の運動を指している。

そのほかまだよくわからぬけれども、結局、そういう羊水と胎児との接点だね。そういうものだろうと思うわけなんです。これは仮定だから、よくわかりませんけれども。こういう絨毛の先っぽに細胞の集まりがあるわけ。これは特殊な内分泌細胞で、内分泌細胞だということは、当時では証明する方法がなかったんです。いまは証明する方法がある。

これ、昔かいた絵ですけれども、こういう細胞が、腸を輪切りにすると、こういうところに分布している。これが「瀬木の帽子」というものです。そういうことがわかったわけですが、ここまではぼくが報告しておいたわけなんです。だけど肝心の、これが内分泌細胞であるということは、当時はわからなかったし、何か変な細胞の集まりがある、そういうわけなんですけどね。

小林さんが、きょう送ってくれたんですが、これ「Immunocytochemistry and Ultrastructure of Segi's Cap (「瀬木の帽子」の免疫科学的及び電子顕微鏡的観察)」というの、こうやって外国向けの宣伝、紹介をしておってくれるわけですね。

これは、そういうものを見つけようと思ってやった仕事でなくて、こういう腸の絨毛というものが、胎児期にどういうふうにしてできてくるかという研究があって、これは東大の解剖の教授の井上通夫先生という人のテーマだった。この人は、そういう意味ではぼくの本当の恩師というかね。そうしておったところ、偶然、その過程でこういうものにぶつかったわけなんですよ、全然予想

せざるものに。ところが、ぼくがかなりしっかりした論文を発表したんだけど、戦争もあったし、忙しいし、だれも気がつかなかったわけ。いまだと見る人が見れば、それは内分泌細胞だということが大体わかるんだけど、そういう知識は最近10年間ぐらいにできてきたわけね。それまではそういう知識がないし、興味を持っておる人もなくて、文献も見つからなかったというわけだね。

ぼくの昔やってきた仕事がみんなまだ生きとって、解剖はこれでいまこういう状況だし、これは昭和7年から10年まで、卒業して3年間にやった仕事ですわね。次にやった仕事は「母子手帳」でしょう。いまそれで愛育事業が来るし、それからがんの統計はがんの統計で結構なにして、この7月には国際がん疫学会を名古屋でやるわけ。ぼくは会長ではないんですけども、日本最初のがんの疫学会ということで、名大の青木さんなんかが努力して、いまやっとなってくれる。ぼくは活動できないけれども、人がそろっとるから、それを名古屋でやる。

前田 青木国雄さんですか。私も1～2度お目にかかったことがあります。

瀬木 そうだ。あのときお世話になったから。

前田 東京で2度ぐらい。

瀬木 あの人は語学が達者で、7カ国語ぐらいしゃべれるの。まあ、本当かうそかわからないけれども。数カ国語までいくでしょう。英語はとってもうまいからね。それはかりでなく、熱心に活動して、いま走り回って……。

前田 現職は？

瀬木 名大の予防医学の教授ですが、がんの問題もまだ研究しています。

こんなものをつくったときがあって、この資料、おたくの方でいろいろお世話になった。これでも貴重なものなんです。

前田 統計情報としても、こんなものあんなものはずいぶんお集めですね。私も統計調査官を9年勤めていましたときに、ユーザーの人たちのご意見も聞きながら、むだなものは切ったり、必要なものは取り入れたりしたけれども、外へ出て、本当のユーザーの立場で使おうと思うと、なかなか食い足りませんね。どうも帯に短かしたすきに長しで。ですから、データの生産、発表というのはなかなかむずかしいですね。

瀬木 幸い、いまWHOには上村一夫さんがいるから、ぼくの方とも連絡して、何回かWHOの報告の間違いを指摘して、向こうからも感謝されていますが、コンピュータになってから、やっぱりつまらぬところで間違いが起きて、仙台でも1回、こっちへ来てからでも1回、同じようなところで2回、3回ぐらい間違いがあったね。しかし、上村さんがいまWHOの、その部長をやっておられるから、とつても……。

これ、京都大学の学長をして、いま学士院会員やっている平沢興さんという人。名前はお聞きになったことないかもしれないけれども、この人からこういう手紙をいただいた。いまちょっと読んでみると、「先般は『瀬木の帽子の再発見』をお送りくださり、心から厚くお礼申し上げます。このことについては、藤田教授の研究を通じて多少は承っておりましたが、お送りいただいた文献で詳しく知ることができ、まことにおもしろく、その重要な意義に感激いたしております。まことにありがとうございます。

ございました」。平沢興さんは、解剖学の西の大家で、京都大学系統の人です。

小川鼎三さんというのが東大系統の解剖学の教授をしていた、東の方の大家。両方とも学士院会員だけれども、こっちはこんな手紙だ、いまの新式の。「『学恩』お送りくださって、実にありがたく感激して読みました。藤田恒夫先生は、東大の大学院では小生の指導下であり、後髪をよくあらわれ、私は最も囑目していましたが、今度の大業績には全く驚いています。小生は井上先生の後任として東大の解剖学講座を預ったのですが、脳のこと、後には心臓のことばかりに気を取られ、貴兄のお仕事にいままで気がつかなかったことを恥ずかしく思っております。小林君はよくやってくれたと、実にありがたく存じます」。そんなようなことで、結局こういう人がPRしてくれているわけね。

前田 最後になりますが、先生は日本統計学会の学会員になっておられませんけれども、統計学会にご出席になったことはあるかもしれませんし、統計の分野なり、いろいろ統計を生産する場に対して、何かご意見とかご批判は……。そんなかた苦しいことでも結構でございますけれども、こういうところは欠けているよとか、こういう方向をもう少し考えなきゃいかぬよということで、何かご意見がございましたら、この機会に教えていただきたいと思います。

瀬木 さっきちょっとお話ししましたね。結局いろいろなところへいろいろな人が発表する。私も、たとえばこれはモノグラフというのが何というのか知らないけれど

も、こういう統計の発表をします。これはそのとき何部か配るわけですが。こういう断片的なものは、後から見ると、どこにどういうものが出たかもわからないし、それかといって、1冊の本があってそこへ全部数字そのものを発表することも、実際はできない。利用する人はほんのわずかなものですからね。だから、こういう統計の目次、目録集というものを、衛生統計なら衛生統計の目次というものを発行する。資料は大学の医学部の図書館とか、そういうところへは配っているわけなんですから、捨てられるかもしれぬけれども、保存しているところもあるわけね。だから、それがどこにあるかということ、大学の医学部の図書館なら医学部の図書館に配付されておるとか、そういうことをずっと1冊の目次集にする。

前田 総索引ですね。

瀬木 衛生統計総索引。これは、いろいろな大学でそれぞれの紀要とか雑誌を持っている。それからいろいろな臨床雑誌にも書かれるから、そういうものを——衛生統計の範囲でいえば、衛生統計総索引というもののかね。そういうものが出るといいかもしれぬと思います。

だから、さっきいった萩山さんのように、日本でほかが出していることでも、結局気がつかずに、外国ばかりでやっているようなふうになる。こっちは外国でやっている先をやっているつもりでおるんだけれども、それがそういう人の書いたものになると、まるで外国の方が先にやって、日本は何もやっておらぬみたいにとられるでしょう。心外ですね。

それはどういうところに原因があるかというと、どの雑誌に出されるかわからない。先ほどの「瀬木の帽子」

の最初の論文だって、こういう問題ですら、一番権威のある解剖雑誌に発表したにもかかわらず、なおそれにだれも気がついてないというのだから、いわんや衛生統計のことなんかは、そういう中心雑誌というものがない。厚生統計協会の「厚生指標」があるけれども、どうせこんなデータばかりのものは1つの雑誌に載せ切れなからね、単行印刷物の形をとらなければ。

あなたにお世話になった「原因別県別死亡率」でもそうですね。あなたのお世話になって、これをつくったんですが、こういうものが単行本で出たということは、ごく少数の人しか知らないからね。やっぱり総目次、そういうものがつくりされて、厚生統計協会で行っている衛生統計の雑誌「厚生指標」、ああいうものがすぐそれにページを提供して、発表したらそこへ載せる、そういうふうなルールでもつくといい。あの雑誌だってまた、ちょっと古いと見ないね。もう少しあれりっぱだといいたくけれども、見たところ薄いから。

前田　ちょっとずれるかもしれませんが、一昨年、厚生科学研究を頼まれまして、私が主任研究者で、要するに、厚生省の中でまとめて発表したいろいろなデータが、どういうものはどういうものの何ページに登載されているかという、いま先生がおっしゃる総索引のようなものです。そういうものをつくる手がかりはないだろうか、そういうシステムはできないだろうかという研究委託を受けまして、IBMのサイエンティフィックセンターの所長とか、筑波大のその分野の助教授だとか、それから西君とか小池君に分担してもらいまして、おとしし1年でまとめたんです。それは厚生省の統計だけなん

ですけれども。

それで、ちょっと1年おいて、場合によっては56年か57年度に、実際どういうふうに動かせばいいかということをやってみてくれないかという依頼の瀬踏みがありまして、忙しくて大変なんだけど、やりかけたことだから引き受けてもよいというふうに返事したんです。だから、それをもうちょっと拡張して、いま先生のおっしゃるようないろんな、衛生統計というか、広い意味で厚生統計でしようけれども、その分野全部に領域を広げればできるかもしれません。

瀬木 だから、よその大学にいる人たちが、そういうことをいつも頭に置いてくれなきゃ困るね。厚生省の中だけというのは、それはそれでいいけれども、よそのものもいっぱいあるんだから。

前田 そういう場合に、登録をする場として、関係している大学だとか研究員、全部にカードでも送りまして、新しいものが発表になったり、あるいは論文が出たら、必ずそのカードで送り返してもらう。それをみんなコンピュータの中へ入れてしまひまして、特殊な方法で並べかえておきますと、幾とおりかの方法で簡単に呼び出すことができるわけですね。たとえば、こういうデータが欲しいといえは、それはどこが発表したという統計報告書、あるいはどういう学会雑誌の何ページに入っているというものが取り出せる方法です。そんなようなことをもう少し研究しないといけない。それはやっぱり相当膨大なものですから、どうしてもコンピュータの中にも収納しておかないと、カード索引だけでは無理ですからね。

瀬木 そうね。

前田 1 つは検索理論ですね。検索の方法論を使ってやる。やっぱり相当のインプットになりますので、相当大的な収納場所がなければできない。やっぱり電算機を使わないといかぬです。

瀬木 それは、これからの分と既往の分をどうするかという2つの問題に分かれるね。

前田 そういう呼びかけをしたときに、こたえてくださるかどうかというのがむずかしい問題ですね。たとえばそういうものを、先生なら先生のところへお送りして、いままで出されたものの全部について、書名と、大体どういう中身かということと、とにかく書いていただかなきゃどうにもしようがないですからね。そういうものが集められますかどうかですね。

今度、この統計学会の50周年記念では、少なくとも学会に発表されたものは全部もう一遍網羅しまして、総まとめをしたらどうかという話しがまとまっております。あわせて、こういうふうに、少なくとも30人の先生方から伺って、歴史的にどういうことが統計の分野で行われ、どんなものがあるんだということも、少しまとめようとしております。

瀬木 この問題の特徴は、ほかの分野の文献と比べて数表があるということですからね。数表というものは、やっぱりあるページを食って、特殊な形をとる。その数表がまた必要なんですから。だから、それをいろいろなところへ、衛生統計でいえば医者との関係が多いから、呼びかけて、そしてそういう総索引を、できれば過去何年間にわたってつくり、将来はそこへ通信をくれるような

ふうにして、それもとこへ発表していくか、「厚生 の 指標」でもいいだろうが、そういうところへ……。

前田 さっきお話ししたのは、例の表題ですね。表題を全部入れるようにしています。表そのもののまでは入れられませんので。

瀬木 それはそうですわね。

前田 ともかく表題、たとえばこれであれば、ここに書いてある「県別、部位別がん死亡数並びに特殊死亡率」とか、こういう形で載るわけですね。それがどういうペーパーの何ページであるという形で。たとえばこういうものが欲しい、その年のやつが欲しいよといったら、これにあるよというのが出るような形。それを厚生省だけのものではなくて、もうちょっと拡大しなければいけない。

瀬木 その厚生省だけのもの、それはそれで意味があるけれども、ほかにもいろいろなものが無数に……。

前田 そうですね。だからそれも収録するような方法。

瀬木 臨床統計なんか入れると、実際は無数にあることはある。

前田 これはやっぱり、厚生省の統計情報部がデータベース的に使命を帯びてやってもらわないといけないかもしれませんですね。個人でできるものじゃありませんから。

瀬木 それ、やってくれればいいが、とてもデータベースで、コマーシャルなことはできぬでしょう。厚生省がそこまで行きゃいいですよ。しかし結局、コマーシャルできぬでも、それはカネ取ってやるだろうから。

前田 まあ、厚生統計協会みたいなところでやればいいと思いますよ。このごろはコマーシャルベースで、コン

ピューターセンターみたいなものいっぱいありますからね。そういうところに入れといて、何かオンラインで引っ張り出すようにするとか。

瀬木　そういう方法も、それは確かにあれなんだが、印刷物でできていく方法はないか。とてもそれでは無理かどうか。それはそれとしてね。

前田　しかし先生、印刷物でそういうものをお手元に届けようと思ったら、大変膨大なものになりますね。もう大変なことだ。いつか行政管理庁が、日本の官庁統計だけの総索引をつくったんです。そのときのメンバーでしたが、大変な分厚いものです。しかもそれは、何年にどこの省で、どういう統計が発表されているかということだけなんですね。だから、たとえば厚生省の人口動態統計がどこに発表されているとか、あるいは国民健康調査というのが毎年発表されているとか、それだけを全部収録しますと大変なものになりますね。

先ごろ岩手で大内賞を受賞したときに、そのおみやげにもらったんですが、重くてしょうがないぐらいのやつで、まあ持って帰ってきましてけれども。(笑)

瀬木　とにかくそういう問題が一つある。数表をかえているという特殊問題がね。

厚生省の方々には大変お世話になったので、いまお世話になった方の資料をずっと、前田さんだの、たくさんの方々、西君も、あの人直接ではないけれども、上田フサさんとか、やっています。

前田　森山先生の話の後でするよと、先生おっしゃっておられたんで、ちょっと伺います。

森山先生とおっしゃる先生は、瀬木先生はどういう関係で影響があったんですか。

瀬木 私が森山さんの名前を初めて文献上で知ったのは、前に話したように昭和22年ですが、私が母子衛生課にいたときに、アメリカに比べて、当然日本の乳児死亡率がとても高いんですね。いまは一緒になって、日本が低いくらいになったけれども、アメリカの5倍くらいあったわけですね。それで、そのときに文献で、森山さんという人がそういうことを研究しているということを知ったわけです。

それから、森山さん自体は、昭和27年に厚生省の曾田さんが主任でやられたWHOのトレーニングコース、そのときに戦後初めて日本へ来て、ちょっと会ったんですが、そのときはしかしまだ曾田さんがなにしてあって、私は別に深入りしたわけでもない。

それから29年に、戦後初めてアメリカへ招待されたときに、ドンが紹介してくれたわけね。ドンは国立がん研究所の生物統計部長だったのですが、ドンが森山さんのところへ一通行って話をしてきたらという。それで森山さん、ワシントン郊外の家へ招待してくれた。

それが第1回目で、そのときはそれで済んで、その次アメリカへ行ったときまた招待されて、そのときの印象記を、私、「厚生」の指標に出したんです。「フェルプス氏を訪ねて」というのが先にあったと思いますが、どうしてフェルプス氏をアメリカで訪ねたかというと、「昭和36年7月、はたるの飛ぶある夜、私は、米国厚生省にその人ありと知られる、世界的に有名な人口統計学者、森山さんの宅に招待された。私は昭和29年以来、再びお訪ねす

る機会を持った」。ここで「ちそうになるわけですね。」「森山さんのように傑出した学者が、米国連邦政府の高級官吏をしておられるのは、日系人として誇りが高い」。この奥さんがなかなかしっかりした社交家で、魅力的であった。

この森山さんの家へ行ったところが、フェルプスというのが私と同じ建物にいるということ、森山さんに聞いたんですよ。それであくる日、すぐフェルプスのところへ行った。そうしたらフェルプスが「オー、瀬木さん」といって、戦後初めてここで会うわけ。日本の占領に来て、そのときのやりとりの後で、ここで約10年ぶりでフェルプスに会う。この文章はフェルプスを訪ねたときのこと、写真にも写っています。フェルプスはそのとき、脳性小児麻痺の疫学調査の仕事をしていたわけ。●日本へ来たときはいばっておったけれども、向こうでは普通の人になっていたわけです。それでも、疫学調査のことをやっていて、私が行ったことを大変喜んでくれた。

森山さん云々というのが「フェルプス氏を訪ねて」に書いてあるわけね。これを、私ワシントンへ送ったわけです。ところが、森山さんの奥さんのお母さんが偶然これを見たわけ。それで「名古屋の瀬木という人なら知っている」といったの。その3年ばかり前に、ちょうどこのころ私の弟の娘も名古屋におって、ロサンゼルスが名古屋の姉妹都市で、女学校か何かがその姉妹都市を訪ねるというので行ったわけ。そのとき、このカリフォルニアのお母さんのところへ泊まってきたわけなんですね。結局、ぼくのおふくろと、この奥さんのお母さんが、名古屋の市立第一女学校の卒業生。向こうは私の方

を知っているし、またその娘もその学校の卒業という関係もあり、奥さんのところで、カリフォルニアで世話になってきているわけね。それで奥さんが、名古屋の郊外の甚目寺村というところがあって、その酒屋さんの家で、名古屋の人だったね、お父さんも。奥さんはそういうわけで、あの広いアメリカで、また偶然といえば不思議なことだね。それで何となしに親近感があって、名古屋にまた来るわけ。向こうも日本へ2～3回来ている。

それからA B C Cの疫学部長として、おとし、2年ばかり来てたの。森山さんも、年が来たものだから、アメリカの統計局長のようなポストから退任した。「フェルプス氏を訪ねて」の別刷が縁になって、それで結局奥さんのお母さんもお父さんも名古屋の人だということがわかったわけ。

それで、森山さんにここへ来てもらって、この部屋で話をした。この人の経歴とか、アメリカでこういう人がどういうふうに出て、どうしたかということ、よくわからなかったから、ここへ来てもらっていろいろ話をしてもらった。

結局アメリカの戦後の人口統計を背負ってきた人なんです。さっきいったように、商務省に人口動態部門があって、それが厚生省に移った。その年次も「Dr. IWAO MORIYAMAの足跡と自伝——米国の人口動態・保健統計とともに——」に書いてあると思うんだけど、連邦政府に勤務し、死亡解析の仕事をする。それから一言触れておきたいのは、渡辺定さん、上田フサさんの貢献ね。これはあの人の口から出た言葉ですけども、結局、森山さんはアメリカのWHO派遣団の団長になって

スイスへ行っ、それで日本の渡辺定、上田フサさんにぶつかるわけね。それが、日本政府がいい人を送ってきたというわけで、何しろ鼻が高かったんだな。

前田 現在もまだA B C Cですか。

瀬木 現在は何か顧問みたいなことだね。A B C Cはもうやめて、アメリカへ行っ……。

前田 アメリカへもう戻られているんですか。

瀬木 アメリカへ戻っ、もちろん正規の役人はやっていませんが、何かこの間、メキシコから手紙をくれましたけれども。定年後、ワシントンのNIH（国立衛生研究所）の近くにて、何かいろいろな仕事やっているようです。あまりはっきりした仕事ではないけれども。

森山さんという人は、そもそもカリフォルニア大学の工学部を出て、それからエール大学で修士課程を修了して、同大学でドクターを取った。エール大学の山口正義さんてご存じですか。ああいうエール大学を卒業した連中がいるのね。そういう人と知り合いになるわけですよ。

ここに経歴がありますね。初めはいまの広島のA B C C。それから、アメリカの連邦衛生統計センターというものができて、ここの国際統計部門の次長というところですかね。それから、同じ保健統計解析部門の解析課長みたいなもの。そして人口動態統計局の死亡解析勤務。これは年度は大分長いことありますね。このときが商務省ね。1940年から1946年、商務省に人口動態部があったわけ。これが1946年に厚生省へ移るわけですね。だから日本へ影響が来たのはすぐです。伝染病みたいなものだ。こういうことを知らないものだから、日本じゃ、そんなものどうするんだという話だった。向こうでは、アメリ

かでこうやってたから日本でもこうやってやれ、そういう考えで来ている。その次が、1939年から1940年、戦時中ですが、フィールドセクレタリー。

前田 フィールドセクレタリーというのはどういう役目ですか。

瀬木 後のこれ見ますと、ハウジングですね。だから住宅衛生委員会の、おそらく実際に見て歩く役かもしれない。アメリカは戦争しておったから、やっぱりハウジングという問題は重要だったんですね。

その前は、ジョン・B・ピエール実験所の助手。それからサンフランシスコで、ジョージ・ウィリアム・フーパー医学研究財団の衛生技士。このときに船の……。

この次のページに「森山巖自記」という自叙伝がある。「人生には多くの一里塚がある。最初は誕生であり、これなくして人生は始まらない。私は1909年1月26日カリフォルニア洲のサンフランシスコで生まれた。両親は九州の出身、母は現在94歳で東京に住んでいる」云々とありますね。

前田 (写真を見て) これが先ほどのお話のお母さんですか。

瀬木 そうです。これは本人のお母さんで、それで森山さんのところへ行くと、女の子で歌を歌う人いるでしょう。森山良子。あの人のレコードがあるわけ。あれが親戚なんだね。森山さんが行くとあそこへ泊まっとるらしくて、いっぱい署名もあるし、あの人のレコードばかり集まっている。

「母は現在94歳で東京に住んでいる。同じく東京在住の弟と妹1人ずつがある。私はバークレイにあるカリフ

オルニア大学工学部を卒業、エール大学の大学院課程を終えた。

私の人生のもう一つの重要な一里塚はカリフォルニア出身の加古敏子との結婚(1946年)である。」そうそう、奥さんは加古敏子という名前なんだ。「妻の両親は愛知県出身である。私共には、30歳と25歳になる息子がある。兄はアメリカ人女子と結婚、ボストン郊外に住んでいる。」…

前田 でも工学部出られて、全く偶然に人口動態に……。

瀬木 船の衛生ですよ。このとき船の中で何か病気がはやって、その調査に船に乗り込んで、そして日本に来るわけ。脳脊髄膜炎のあれを調べて、そして日本に来た。サンフランシスコ湾ならどうするか、よく知っている。

船の換気問題ですよ。

前田 それで生物統計の教授になった。

瀬木 そういうことですな。

前田 どうも先生、本当に長時間ありがとうございます。